

2006年度

# 卒業論文



# スポーツマンシップの問題と競技スポーツの「内」と「外」

## —川谷茂樹『スポーツ倫理学講義』の受講ノート—

稲垣 将明

特記：本稿は関西大学文学部「インターファカルティ教育：生涯スポーツ・身体運動文化コース」へ2007年1月15日に提出した「卒業論文」を大幅に修正したものである。論題も当初は「競技スポーツの「内」と「外」—スポーツマンシップに基づいて考察する—」であったが、今回、修正の意図を明確に表すために標記のように書き改めている。

元論文(卒論)の制作動機は、2006年度の「卒業論文制作ゼミ」(春・秋学期の通年)における指導教員である田村典子先生並びに溝畑寛治先生のご指導のもとで、資料探しでやっと見つけた川谷茂樹著『スポーツ倫理学講義』に大きく後押しされて膨らんだ。同書の内容が私の執筆構想と日頃の問題意識とにぴったりであったからである。標題の「内」と「外」という視点は、川谷著書に出会う前にゼミにおける数々の対話をとおしてほぼ固まりかけていたが、同書を読み進むうちに同じ川谷視点を見つけて一層と同書に引き込まれることになったので、ものの見方の観点として援用した。

同書は、私たち学生にとっても関心のあるたとえば身近な松井秀喜の「話題」などからも題材を集約して、著者の専攻する哲学/倫理学の立場から考察されている。しかし、親近感もてる題材を軸にして展開されているものの、哲学的な原点にまで遡って「これでもか、これでもか」と徹底的に考え抜くという同書の執筆姿勢は、やはり私にとって、馴

染めないものであった。しかも、同書の文体は人気漫画などに題材を借り出したりする関係もあって平易に書かれていて、私にとってもスラスラと読み流せるものであったので、結果として、その「徹底的に考え抜く」という核心の部分の読みが十分にできていなかったことに気づくことになった。

そして、その気づきを得たのは、提出すべき論文の最終的な指導を受ける段階になってからの再三再四にわたる面談の結果であった。この段階に至って新たに伴義孝先生にもご指導を受けることになった。この最終的な段階に至って3人の先生方から指摘されたことは「構想と内容は了としても、引用箇所の指示不徹底のために文章が参考文献の丸写しに近い」ということと、上記の私の「気づき」のことであった。スラスラと読み流していた関係もあって、参照した「川谷文章」のほとんどが意図することなしに「私の文章」のような記述になってしまっていたのである。もちろん初めての論文執筆だからとの「言い訳」は効かない。「卒論」の提出期限を直前にしたのである。そこで、3人の先生方のご指導のもとに、その段階における時間的に可能な必要最小限の修正を施して、「卒論」はどうか提出することができたのであった。

本稿は、その後の口頭試問での指摘や学びを意識して、またその後の引き続いてのご指導を3人の先生方をお願いして書き改めたものである。しかし元論文(卒論)のほぼ全容

が川谷著書における議論をもとに構成されたものである。そしてその構成意図を私自身が尊重したいということもあって、本稿で大幅な修正を行ったとはいえ全体の文脈はほぼ一緒のままである。特に改めたところは、本文中に、「川谷議論」からの「引用」であることを適宜明記することであった。この作業によって、本稿は、卒論の字数制限を大幅に超過することになってしまった。もちろんこの「改め」と「大幅字数超過」の件を明記したとしても論文構成の稚拙さの責任は私にある。しかし3人の先生方のご指導のもとに、こうして本稿をまとめ終わってみると、川谷茂樹氏の授業「スポーツ倫理学講義」の「受講ノート」としてならばなんとか容認していただける体裁が整っているのではないかと思える。

最後に、本稿の再提出にあたって、関西大学文学部「インターフェカルティ教育：生涯スポーツ・身体運動文化コース」で学んだ4年間に感謝し、特に本稿の完成に至るまでのご指導をお願いした田村典子先生、溝畑寛治先生、伴義孝先生をはじめとして、同コースのすべての先生方に衷心より御礼を申し述べたい。なお、この「特記」も、3名の先生方によるご指導を得て書き加えたものであることを付記しておきたい。

## 1. はじめに

私たちが日常的に携わっている「競技スポーツ」（以下「スポーツ」という）においては「スポーツマンシップ」という言葉がよく取り上げられる。本稿では、このスポーツマンシップという「言葉」の「意味の使われ方」を考察してみることで、スポーツにおける「内」と「外」という2つの局面の問題に注目してみる。また、本稿では、スポーツに介在しているさまざまな問題を「内」と「外」という2つの局面から捉え直してみることで、「スポーツとは何か」という問いについても

再考してみたい。さらに本稿では、これらの考察をとおして、スポーツ自体の本質的な在り方を考え直してみたい。

本稿では、スポーツに介在する「内と外の問題」を、哲学者である川谷茂樹の著書（2005・以下「川谷本」は発行年を略）における捉え方を参考にして、次のように設定する。

「内」＝本稿ではスポーツにおいて純粋に勝利を追求しリアルな価値を追求する「スポーツをする人＝競技者＝当事者」の内的な欲求に基づいた「価値・考え方」を「内」の問題として定義する。川谷はスポーツ自体の内部に潜在している「内在的原理」に基づく「価値・考え方」を「内」の問題として定義している。

「外」＝本稿では日常生活の道徳的なレベルで考えられるスポーツの勝ち負けなどに関して「スポーツを観る人＝観察者＝外部者」の立場で捉える「価値・考え方」を「外」の問題として定義する。川谷はスポーツの外部からスポーツに求められている「外在的原理」に基づく「価値・考え方」を「外」の問題として定義している。

本稿では、スポーツの外在的道德規範をスポーツに適用したり応用したりすることを試みるのではなく、主にスポーツマンシップの問題に焦点を合わせながら、スポーツの「内」と「外」という原理的な問いにまで遡って検討してみて、競技者の立場から考えるスポーツとスポーツマンシップの本質について考察してみることを目的にしている。

## 2. 問題の設定

カント哲学を専門にしてきた川谷茂樹は下記の問題設定のもとに自著『スポーツ倫理学講義』で「スポーツとは何か」の問題を倫理的に問う。この問題は長年にわたってスポー

ツに取り組んできた私にとっても課題であった。このたび「卒論」制作にあたって同書を手し再三読み直した私は川谷「スポーツの見方論」に共鳴してしまったのである。

現代はある意味でスポーツが繁栄を極めた時代である。マスメディアでスポーツを報じない日はないし、子供の憧れの職業上位には必ずスポーツ選手が挙がる。もちろん個別には存続が危ぶまれているスポーツもあるが、スポーツという営みそのものの消滅という事態は、おそらく想像されることすらないだろう。スポーツの存在は、私たちにとってほとんど空気のようなものである。百分の一秒単位で記録を更新するために自らの肉体をいじめ抜く陸上選手や、年がら年中野球をしている野球選手、わざわざお金を払って彼らの試合を観に行くたくさんの人々が存在することを、私たちは、何となくあたりまえのように思っている。しかし、スポーツの存在がたとえ自明の事実であるとしても、スポーツそのものは必ずしも自明ではない。別の言い方をすれば、一度考え始めるとなかなかうまく解答が見つからない、多くの問題がスポーツには存在する。(川谷前掲書「まえがき」より)

川谷は、同書で「多くの問題」を考察するために、4点の「問い」を議論の出発点として立てている。しかし、本稿では、数多く存在している「自明ではない多くの問題」の中でも特に「スポーツマンシップ」の問題に関わるいくつかを考察してみるために、現在の私の課題でもある、次の「問題設定＝川谷設定第1」に焦点を絞って考えてみたい。

問題設定(川谷設定第1)＝「相手の弱点を攻めることは卑怯なことなのか」

なお川谷は、上記の自らの「問い」に加えて、次の3点を取り上げて、同書における川谷論点としての4点の「問い」としている。

川谷設定第2＝「いついかなるときもルールを守らなければならないか」

川谷設定第3＝「格闘技などで暴力が容認さ

れているのは、なぜか」

川谷設定第4「ドーピングはなぜ悪いのか」  
しかし、本稿では、これらの3点の問題については、関連的に必要のある場合を除いて、個別に検討するという設定としては触れないことにする。

これら「4点」の問いはすべて「スポーツに関わる行為の道徳的善し悪し」の問題である。すなわち「スポーツマンシップ」の問題である。本稿では、ここに抽出した「問題設定」について、「はじめに」で指摘しておいた「スポーツの『内』と『外』という考え方を適用して、主にスポーツマンシップの問題の検討をとおして以下に考察してみたい。

ところでスポーツに携わる私たちに常に付いて回るのは「スポーツマンシップ」という言葉である。この言葉を初めて耳にしたのは、いつ、どこで、誰からか、といった正確な記憶がないにもかかわらず、いつしか「スポーツに関わるうえで、必ず守らなければならない道徳的、または精神的な規範である」という観念を抱くことになっていた。この観念は、私だけに留まらず、スポーツに関わっている当事者、またはそうでない外部者にも通用するほど影響力の強い言葉となっている。したがって上記の問題設定は、単に「スポーツをする人＝競技者＝当事者」のみに問われるべき問題ではなく、一般的な生活権念として「スポーツを観る人＝観察者＝外部者」にも問われるべき問題である。そこで本稿では、この問題設定に関して、「当事者」と「外部者」のそれぞれの立場から相互批判的に考察を進めることになる。まず考察を進める前に、「スポーツ」と「スポーツマンシップ」の意味(概念)について、その語源にまで遡ってみて、整理しておきたい。

### 3. 語源と意味の変化について

どんな言葉にも語源と呼ばれる「始まり」がある。まず、スポーツ【sport】及びスポー

ツマンシップ【sportsmanship】の語源的な誕生の経緯と意味の変化の問題をスポーツの歴史（岸野・1972・1977）からひもといてみたい。

### 3-1 スポーツについて

スポーツ【sport】の語源については諸説がある。しかし、現在ではフランス語学者であるGamillscheg, E. の説が有力視されている。すなわち【sport】の語源は中世ラテン語の【de-portare】に由来しているらしい。そして、【de-portare】の【de】は「反対・拒絶する」といった意味をもつ。また、【portare】は「運ぶ・持ち去る」という意味である。往時の「運ぶ」という行為は肉体労働のことであったから、【de-portare】とは「肉体労働を拒絶する」という意味に転じて、「気分転換・気晴らし」を意味する動詞の【deporter】や【desporter】へと推移し、さらに【desport】という名詞がつくられていったとされている。そのフランス語【desport】が11世紀頃にイギリスに取り入れられて【disport】に変形して、16世紀頃には【sport】に転化して用いられるようになったのである（岸野1987・p. 521）。

スポーツという言葉のもつ意味は（すなわち語義は）これらの語源の意味を継承しながら時代とともに変遷していった。16世紀頃には「身体運動を含んだ遊び、見世物としての遊び、演劇、冗談などの広義な楽しみ」を意味するようになり、17世紀には「狩猟活動」も加わっている。そして19世紀になって、現代的な用法に近い、「競技的性格を持つ、戸外で行われるゲームや運動に参加すること」として「そのようなゲームや娯楽の総称」という定義が現れてきている。（坂井・2000・p. 104）

わが国にスポーツという言葉が紹介されたのは、19世紀はじめで、このころの英和辞典にも収載されている。日本語訳としては「消

暇（慰み）、おどけ、滑稽、狩猟」などとされていた。明治時代から大正時代にかけて「競技」という訳も適用されている（阿部・1995）。このように英和辞典には比較的早くから取り上げられていた。しかし、国語辞典に収載されるのは20世紀に入ってからであるらしい。

1932年に『大言海』が、「スポウツ」という表記法で、「戸外遊戯、また、野外運動競技」という説明を付して、初めて収載している。この頃に「スポーツ」という外来語が社会的に定着しはじめたとみることができる。その後多くの辞典に「スポーツ」の記述がなされることになるが、語源に由来する本来の語義とは、少し異なった意味合いが時代ごとに加えられていった。また『辞海』（1954）は「運動競技、戸外遊戯、野球、庭球から登山、狩猟にいたるまで、遊戯、競争、肉体的鍛錬の要素を含む運動の総称」と説明している。このように本来の「娯楽」や「遊戯」といった意味に併せて「鍛錬」という要素が加えられてくる。この「鍛錬」という語義は少なくとも語源にはなかった解釈である。この辞典にみられる「解釈の変遷」は、日本のスポーツの歴史を語るうえで注目すべきことである。（坂井・2000・p. 104）

### 3-2 スポーツマンシップについて

上記に「スポーツ」の語源と語義の変遷の歴史をみてきた。次に本題である「スポーツマンシップ」という言葉の誕生の経緯をみておきたい。

もともとスポーツマンシップという言葉には、倫理的な意味はなく、主に狩猟家の技量を意味していたらしい。倫理的な意味が加味されたのは19世紀末から20世紀初頭にかけてである。その経緯は、「アマチュアリズム」の成立経緯の背景と同様であって、19世紀後半のイギリスにおけるパブリックスクールや大学などのエリート教育において「ゲーム活

動の組織化や競技活動」が隆盛してきて、「アスレティズム」が興隆した結果として、付随的にスポーツマンシップが問われることになる。つまりスポーツマンシップという言葉は、スポーツなどの競争的・競技的な活動において求められる技能や知識における、また活動に参加する人間としての精神的資質や礼儀作法などの態度に関わって、道徳的で倫理的な意味を表すようになってきたのである。すなわち、アマチュアリズムとスポーツマンシップという言葉は、19世紀のイギリスのエリート教育における「スポーツ」の導入に際して活用されだしたのであったが、近代オリンピックの理念とかかわって、世界的に急速に普及することとなった。しかし、意味は、時代の変化とともに微妙に変わってきている。(嘉戸・1992・p. 167)

さらに、スポーツは、クーベルタン男爵の提唱で1896年に開催された第1回近代オリンピックアテネ大会を契機にして急速な国際化の道を進むことになる。この場合、スポーツの国際化とは、「競技ルール」の世界的な統一の過程の問題である。しかし、そのスポーツに取り組む「競技者」はその国々の文化を背負っている生活者であって、当然のことに「スポーツ」に取り組む姿勢や態度としての「スポーツマンシップ」は、それぞれの民族的な文化の影響を少なからず受けて変化していく。(伴・1994・pp. 29-52)

ところで日本でスポーツマンシップという言葉が一般的に国民の間で認識されるようになったのは1964年に開催された東京オリンピックの前後のことである。その経緯には1963年に出版された金子藤吉の著書『コーチのためのスポーツモラル』が少なからず影響しているらしい。同書はスポーツマンシップについて次のように要約している。

スポーツの主な価値はスポーツの精神すなわちスポーツマンシップにある。もしも学校スポーツの中にこの精神が存在しないならば、

そこには何らの意義も認められない。

さて広瀬一郎が、上記の金子「著書」にまつわる経緯を指摘してその理論を援用しながら、著書『スポーツマンシップを考える』(2002)において、現代日本におけるスポーツマンシップの意味の捉え方について次のように説明している。

スポーツマンシップとは、一口に言って「尊重(respect)する」ことであって、試合の相手を尊重し、審判を尊重し、試合の規則を尊重することである。このことは競技者の行うゲームそのものを尊重することに繋がる。重要なのは公正(フェアプレー)の精神である。この精神から「正義」「規則に忠実」「審判に従順」「規律を守る」などの徳目が導き出される。そして競技者の守ることとして「最善を尽くし」「勝って誇らず」「負けて悔いない態度」「明朗」「責任」「謙虚」「勇気」「忍耐」などを指摘する。さらに競技者同士がお互いに示すべき態度として「同情」「親切」「協同」「友情」「敬愛」などを指摘する。そしてこれらが統合されて良き人格(Good Sportsman)となることが期待されるのである。スポーツマンシップはその他の「倫理」や「道徳」よりもいっそう現実的なものであって、身につけるためには、修練の在り方という機会に左右されていることを見逃してはならない。さらにスポーツマンシップを体現するためには下記のような行動原理が不可欠である。

- ①フェアにプレーしなければならない。
- ②勝つためにベストを尽くす。
- ③味方が不利ならばいっそう奮闘する。
- ④負けたら笑顔でそれを承認し、次回に再び試みるつもりで帰って来る。
- ⑤審判員の判定を承認し、負けたからといって復習など図ってはいけない。
- ⑥来訪したチームは賓客として待遇し、地位の有利があれば彼らに与える。

民主主義は、自由と平等を基本としており、

「自由、平等、友愛、協同」の精神を公正に貫かなければ成立しない。この意味において、民主主義は、スポーツマンシップの内容とまったく軌を一にしていると考えられる。(広瀬・2002・pp. 22-23)

また『広辞苑』によれば、スポーツマンシップとは、「正々堂々と公明に勝負を争う、スポーツマンにふさわしい態度」と記され、『ジーニアス英和辞典』によればスポーツマンシップ【sportsmanship】とは「フェアプレー」と記され、『パーソナルカタカナ辞典』には「スポーツマンに要求される精神、気質。正々堂々と勝負するフェアな態度」と記されている。それでは、一体「スポーツマンにふさわしい態度とは何なのだろうか」「正々堂々とは何を意味しているのか」「公明とはいかなることなのか」などの疑問がつきつぎに浮かび上がってくる。一方で、スポーツマン【sportsman】の意味は、『広辞苑』によれば「運動競技の選手。また、スポーツの特異な人」と説明されており、『ジーニアス英和辞典』によれば「スポーツ愛好者、運動家、スポーツマンシップを持っている人」と説明されている。ここにおいても、運動競技の選手や運動愛好家や運動を得意とする人たちにとって「ふさわしい態度とは何なのか」、そして「ふさわしい態度」とは「正々堂々と公明に勝負するフェアな態度と同一なのだろうか」といった疑問が浮かんでくる。

こうして、文献によって整理してみても、「スポーツマンシップ」や「スポーツマン」という言葉の用語法にはさまざまな疑問を持たざるを得ない。そして、本稿におけるその疑問とは、「一体スポーツマンシップとは何なのか」ということに集約される。「スポーツマン」という言葉に関しては、現代のあらゆる辞典類においても、「運動競技の選手、運動愛好家、運動を得意とする人」というように運動という物理的な尺度や観点からみた判断基準のみしか浮かび上がってこない。そ

こには、付随的な「正々堂々」とか「公明」とかといった人間性の問題に関わる言葉は一つとして見受けられない。一方で、「スポーツマンシップ」には、スポーツに関わる人たちに重い足枷が付きまとうことになる。この経緯には、スポーツマンシップという言葉に対する世論からのイメージが、すなわち「外」からのイメージが、多大に影響しているように思われる。

この「外」からのイメージに注目するならば、「スポーツマン」という言葉にも、当然のことに、「健康的で、忍耐力があり、明朗で活動的な人、また常にフェアプレーの精神を心がけ、さわやかな」人物であるというプラスイメージが付帯していることが分かる。しかし一方では、「汗臭い、性格的に表裏がある、声大きい(うるさい)」などといったマイナスイメージが付きまとうことも事実である。本稿では、この「外」からのイメージづけでもっとも足枷になるのが、「常にフェアプレーの精神を心がける」ということだと考える。私たち「競技」に携わる者には、プレー中に「フェアプレーという精神」がまわりつくのは当然のこととしても、もしくは否応なしのこととして了解したりさせられたりするのだが、競技後やプレー外の日常生活においても、世間から「スポーツマンらしくない振舞いだ、スポーツマンなのだから」などと言われるイメージが付きまとう。こうした経緯に展開するのはなぜなのだろうか。

上記に、「スポーツ」と「スポーツマンシップ」についての語源的な意味とその後の意味の変遷についてみてきた。そして、ここで認識しておくべきことは、「語意」は時代とともに変わるということと、その変化の過程には「外」からの社会的な影響が働いているという事実である。本稿では、現在の日本社会における「スポーツマンシップ」という言葉に対する「外」からの受けとめられ方に関して、川谷茂樹の著書『スポーツ倫理学講義』

を参考にしながら、以下に検討を加えてみたい。

#### 4. 「外」からみるスポーツマンシップ

スポーツに関して全く無関心でない人は日常的にスポーツを直接にまたメディアを介したりして観戦する。毎日の生活においてもスポーツの話題は事欠かない。しかし、スポーツはこのように密接に現代人の生活と結びついているのに、そのスポーツを取り巻く言説に関して、たとえば「ゴルフは果たしてスポーツなのか」と疑問を感じたりして、全く違和感を覚えない人は少ないのでなかろうか。川谷は、こうした違和感が起こることに関して、その根底に「好きだけど嫌い」「嫌いだけど好き」、「面白いけど面白くない」「面白くないけど面白い」といったスポーツに対する相反する価値観的な受けとめ方が介在していることに注目する。そして川谷は、哲学的に「スポーツとは何か」と問い直してみることによって、その根拠をある程度明らかにすることができると思う。本稿もこの川谷の見解にそって議論を進めたい。さらに、スポーツは観戦専門という人もいるし、するのは好きだが見ないという人もいる。川谷は、こうした競技者と観客の立場の相違を「実はとても大事な論点」とみる。(川谷・pp. 7-9)

本稿は、こうした川谷の指摘する論点に着目しながら、「スポーツマンシップ」の意味づけに関して、「スポーツを観る人=観察者=外部者」の立場に代表される「外」からの問題について考察する。まず、高校野球における「2つの伝説」について考えてみたい。

##### 4-1 2つの伝説と問題点

スポーツマンシップという言葉の概念については、既に体育理論の研究者などによって多くの研究が行われているが、いまだに決定的な見解は現れていない。その理由は、スポーツの語源が世の中の情勢や風潮によって時代

の流れとともにさまざまな意味合いに変化してきていることと同様に、スポーツマンシップの定義と概念が揺れ動いてきたからではないかと考えられる。そこで、まずは、日常的に生活の中で耳にするスポーツマンシップという言葉で「何を理解しているのか」という観点から考えてみたい。スポーツマンシップという言葉は既に日本語としても定着している。スポーツ観戦者もマスコミ(観察者)も、また競技者自身もこの言葉を日常的に使用している。そして一般的には、スポーツマンシップに則っているとみなされる行為は称賛される。反対の場合は非難される。したがって、スポーツマンシップという言葉は、競技者の行為の「善し悪し」を決める「外」からの基準として用いられることが少なくない。(川谷・p. 14)

まず、「外」からの基準としての一例を挙げてみる。現在ニューヨーク・ヤンキースで活躍中の松井秀喜選手が、高校野球名門の星陵高校時代に甲子園大会に出場して明德義塾高校と対戦した1992年の夏、あの有名な「五打席連続敬遠」「松井封じ」という事件が起きている(松井秀喜ホームページ参照)。川谷もこの事件を「スポーツマンシップについて」考えるための問題提起にしている。その観点は、この事件に対する見方の問題である。

前代未聞のこの作戦は「勝利至上主義だ、スポーツマンシップに則っていない」と批判されました。一方で明德側を擁護する論調もありました。(川谷・pp. 14-15)

この1つの事件(事実)に対するまったく異なる見方が「スポーツを観る人=観察者=外部者」に存在するという事実をどのように考えるべきなのか。この矛盾が本稿における論点となる。そして川谷は、この矛盾の生起する経緯から、スポーツマンシップという言葉の曖昧さを、すなわち「外」からのものの見方の曖昧さの存在することを指摘して問う。

そもそもスポーツマンシップとは何なのか、



スポーツマンシップに則っているかどうかの判断基準は何なのかということ、きちんと説明できる人はいるのでしょうか。それが説明できないならば、明德の作戦は安易に非難したり擁護したりできないのではないのでしょうか。(川谷・pp. 14-15)

そして川谷は、松井選手へのこの敬遠策問題に限らず、世間では往々にして「口論」と「議論」とが混同されてしまっている事実を取り上げる。川谷にとって口論とは感情論にすぎない。哲学者の態度としてこの感情論での物事の判断の決着を容認できない川谷にとって「マスコミの記事」などはそのほとんどが「感情多数決主義」である。一方で哲学をはじめとする「学問」では多数決によって「正当性」を保証できるものでない。この観点に立つ川谷は、「スポーツマンシップとは何か」についての「議論」が学問的に必要だと考える。そこで川谷は、この議論のために、もう1つの「伝説」を取り上げる。本稿もまた、競技者の立場からこの「議論」を行うことを目的にしているので、引き続いて川谷「議論」を援用したい。その前に本稿の押さえておくべき論点を整理しておく。

この「事件」では、「松井選手が負け」という勝負の厳しさを見せつけられたことも事実だが、「松井選手」の凄さを示す「伝説」として語り継がれていることも事実である。しかし、見方を変えれば、この事件には「2つの伝説」が存在していると考えてもいいのではないか。1つは五連続敬遠策を行使されるほどの打撃力を警戒された「松井選手」の技能レベルの高さという伝説。もう1つは、ひとりの打者に対してあえて五連続敬遠策を行使して「勝負に徹した」という相手チーム側の事実。この事実も伝説ではないか。私は、注目すべきであるという意味において「伝説という言葉」を適用する場合、これら「2つの伝説」について考察してみる必要があると考えている。

本稿で私が議論したいのは「スポーツマンシップ」という概念についてである。スポーツマンシップとは何なのか。この問題が明らかにならない限り、私たちがどのような感情を抱くとしても、上記に要約した「2つの伝説」にかかわって、安易に「敬遠策」を非難したり、擁護したりできないはずである。もちろん川谷もこの目線で議論を続ける。

#### 4-2 もう1つの伝説と3つの見解

スポーツ界にはさまざまな「伝説」が存在している。しかも神話化されさえする。

1984年のロサンゼルスオリンピックでも1つの伝説が誕生しました。山下泰裕とモハメド・ラシュワンによる柔道の決勝戦です。実力最強の山下選手は二回戦で右足を負傷し、準決勝でさらに悪化させ、決勝では立っているのもやっとの状態になってしまいました。ところがラシュワン選手はその右足を「敢えて攻撃せずに」闘い、結果試合に負け、金メダルは山下選手の手に渡りました。(川谷・p. 17)

結果はそこに留まらない。負けたラシュワン選手は、山下選手の負傷した右足を敢えて攻めずに闘ったこと、また表彰台の中央に上がろうとする「山下」に手を差し伸べ「負傷」を気遣ったことが「友情の証」として世界から評価されて「伝説」となる。さらにその経緯が「スポーツマンシップに則った、正々堂々とした」行為であると称賛されてユネスコからフェアプレー賞を授与される。(山下泰裕「Wikipedia」参照)

本稿でも、川谷の議論 (pp. 17-18) を借りながら、このラシュワン伝説に焦点を合わせて考察してみたい。川谷は、実際にはこの伝説自体を虚偽であると考えているのだが、経緯を伝説のままに受けとめることにして議論を進めるために実験的にある仮定を立てる。つまり川谷は、ラシュワンが山下の右足を容赦なく攻め続けて金メダルを獲得したという

反事実的仮定を立てて「アンチ＝ラシュワン」と命名して議論を進める。この場合、川谷は、「アンチ＝ラシュワンの行為」は「スポーツマンシップに則っていないと見なされる」のかという問いを立てて議論を進めるために、次の「3つの見解」(p. 18)を設定する。

1つ目の見解＝弱点を攻めるのは卑怯で、スポーツマンシップに反する。

2つ目の見解＝できるだけ弱点を攻めずに勝つのが競技者としてベストだ。

3つ目の見解＝競技者は勝利のために積極的に弱点を攻めるべきだ。

1つ目と2つ目の見解の違いは分かりにくい。設定者である川谷によると、1つ目の見解は「アンチ＝ラシュワン」の行為を「100%」否定しているものであって、2つ目の見解は「50%」否定し「50%」肯定していると考える。そして、3つ目の見解は「アンチ＝ラシュワン」の行為を「100%」肯定するものである。この設定のもとに川谷は、1つ目の見解と3つ目の見解は全く正反対であることを含めて、3つの見解がそれぞれ異なっていることへの注意を促す。ところでこの川谷問題提起のように、スポーツマンシップという言葉は元来競技者としてのあるべき姿を示しているはずなのに、これらの3つの見解においてはそれぞれ見方の不一致という対立が現れている。川谷の視点は、この3つの見解の対立が「スポーツマンシップを巡る具体的な議論(口論?)の背後に」常に存在していることを見逃さない。そして川谷は、この「3つの見解」の対立の問題に焦点を合わせて議論を具体的に進めるために、森川ジョージの『はじめの一步』(1990年初版・講談社)というボクシングを題材にした人気漫画の一幕を事例として取り上げる。私もこの漫画作品のファンであることからしても、もうしばらく、川谷視点に同調しなければならない。

#### 4-3 見解の対立

川谷は前掲森川漫画の第60巻(2002)に描かれている「一幕」を問題にする。一幕とは、主人公である「幕の内一步」のジムの先輩である「鷹村守選手」が、世界ミドル級タイトル戦に挑戦する場面である。チャンピオンは「紳士的、クリーンファイトに徹する」という設定の「デビット・イーグル」である。試合の最中に鷹村選手は「左」の頬を負傷してしまう。このボクシングでよく見られる光景に対して、川谷の「外」の見解としての見立ては、「この場合、試合を早く終わらせて確実に勝利を得るために、チャンピオンは鷹村の左目を狙うのが定石」だと一応判断する。つまり、上記の3つ目の見解「競技者は勝利のために積極的に弱点を攻めるべきだ」の立場を支持するのである。

ところが作者である森川は別の構図を描く。つまり、チャンピオンは常識を無視して、鷹村の負傷箇所を敢えて狙わない。すると今度は「イーグル選手」の「右の頬」が切れる。そこで、この時機到来を見逃さない「鷹村」は、チャンピオンの「右目」を集中的に攻撃する。この森川創作状況に、川谷議論は自作の設定論理を重ねて、「イーグル」を、山下の負傷している右足を攻めない「ラシュワン」に見立てる。そして、川谷は、正反対の行為に打って出た「鷹村」に「アンチ＝ラシュワン」像をダブらせて議論の進展のための新たな状況を設定することになる。

ここで、アンチ＝ラシュワンの鷹村選手には観客から「えげつねえ」「男らしくねえ」「尊敬できねえ」と激しくブーイングが浴びせられます。観客が先ほどの3者(3つの見解)の中で、(1)(1つ目の見解)ないし(2)(2つ目の見解)の立場であることが分かります。この状況の中で、観戦中の現役(練習生・A)および元プロボクサー(B・C)は次のように会話を交わします。(川谷・p. 19・括弧内補注引用者)

ここで川谷は、この森川創作漫画に場面を借りて、観戦者であるものの「競技者」の立場としての見解を登場させて、一般観客の見解との比較を試みる。

- A「地元なのに凄いブーイングだ……」  
「無理もない……」「王者の紳士的な態度とは全く逆のことやっているし……」  
B「お前までそんなこと言うのか？ 本来なら相手の弱点を狙えと大歓声のところなんだが」  
A「そ、そうなんですけど…」  
B「イーグルが傷口を狙わなかったことで観客も少し勘違いしているのさ」  
「弱点をつくのは本道だ！ 純粋な職人（プロフェッショナル）の姿だぜ」  
C「純粋ですね」「鷹村さんは純粋に1つのことだけを遂行していますよ」

川谷は、森川漫画のこの会話場面を指して、作者の森川が「スポーツマンシップとは何か、競技者としてあるべき姿とは何か」という問題を提起しているを見定める。

元プロボクサーのBとCは明らかに観客と立場を異にしている。川谷はこの異なる構図に前述の「3つの見解」を当てはめる。つまりBとCは3つ目の見解「競技者は勝利のために積極的に弱点を攻めるべきだ」の立場にある。この場合、逆に「スポーツを観る人＝観客＝外部者」としての「外」的な「観客」の立場（1つ目の見解）からは、BとCの態度（考え方）は「アンチ＝ラッシュワンドである鷹村選手を擁護する」立場（3つ目の見解）と同様であるとみなされて「スポーツをする人＝競技者＝当事者」としての「内」的な「ものの見方」を「えげつねえ」「男らしくねえ」「尊敬できねえ」とみられて非難されることになる。川谷は、ここにきて、スポーツマンシップと競技者の在り方の問題に関する「ものの見方」としての「対立軸」がなぜ成立するのかという問題に議論の重心を移すために次のように提案する。

「まずは、この対立の間で動揺するボクサーA（彼は先に引用した森川漫画の主人公の幕の内一歩です）の立場に身をおいて、考察を始めましょう」（括弧内補注の傍点字句のみ引用者補注）

この提案の意味するところは明白である。2つ目の見解の代弁者として設定されている「A」の「ものの見方」は、「スポーツをする人＝競技者＝当事者」にも、あるいは「スポーツを観る人＝観客＝外部者」にも立ち現れることであって、さらに突き詰めれば、実際には1つ目の見解「弱点を攻めるのは卑怯で、スポーツマンシップに反する」が「内」としての競技者に肯定される場合もあるし、3つ目の見解「競技者は勝利のために積極的に弱点を攻めるべきだ」が「外」としての観客に肯定されることもあることを示唆している。すなわち「A」の立場は、「スポーツマンシップ」と「競技者」の問題へ視点を合わせる場合に、いかなる「個人」にあってもしばしば立ち現れる「葛藤」の問題なのである。

次に本稿では、川谷議論にそって、3つの見解における「対立」と「葛藤」という視点に立って議論を進めるために、競技における「弱点」の問題について検討してみる。

#### 4-4 「弱点」の意味するもの

まず川谷の問題提起を紹介しておきたい。

先ほどのケースは、競技者の一方あるいは両者が負傷しているという特殊なケースでした。それでは、そうした制限のない場合、一般的に弱点を攻めることは果たして悪いこと、スポーツマンシップに反することなのでしょうか。（川谷・p.21）

ここでは、川谷の指摘する「弱点」についてまずその「意味」を整理してから議論を進めなければならない。スポーツには競技方法の特性上から派生する2つのタイプがある。川谷はそれを「対面型スポーツ」と「非対面型スポーツ」との2つとして分類する（p.

21)。

そして、球技や格闘技などの相手のある対面型のスポーツでは「当然相手側の弱点を攻める」ことが競技を成立させるための大きな要因になっている。この要因は勝ち方の方程式の要因と言い換えてもよい。もう一方で陸上競技やスキージャンプのように「弱点を攻めることができるかどうかよく分からない」すなわち直接には相手の身体などを攻めることのできない非対面型のスポーツがある。

川谷は、「弱点を攻めるのは悪いこと？」(pp. 21-24) という節において、この問題について議論を展開するために、「弱点a」と「弱点b」という2つの面から弱点の捉え方を整理する。そして、とりあえずの議論をより明快にするために、ここでは対象スポーツを格闘技などの「個人的スポーツ (individual sport)」に限定して考察を進める。

「弱点a」=競技者の不得手とされる技能、あるいは身体的に劣る部分（通常の場合は鍛錬不足などのために）が弱点と呼ばれます。ボディが弱いとか、フットワークが悪いとか接近戦に弱いとか言われます。これを弱点aと呼びましょう。(括弧内補注引用者)

「弱点b」=試合を進める中で生じる、状況依存的な弱点があります。テニスで相手を適当に動かしておいて、いちばん取りにくいところにボールを落とすとき、そこが（こうした戦術的に攻める場合の相手の）弱点と言われることがあります。これを弱点bと呼びます。(括弧内補注引用者)

もちろん「弱点a」と「弱点b」とは、攻撃者と防御者のいずれの立場と状況においても、さまざまな形に錯綜して表れる。この事実を、川谷は、「弱点の意味」と定義して議論を進める。次に「弱点a」と「弱点b」のそれぞれを「攻める」こととの関係を、「スポーツマンシップ」の問題を考えるための前提条件として、整理しておく。

まず「弱点a」を攻めることは、いわば当

たり前の戦術「勝利の方程式」であって、この経緯にスポーツマンシップ上の問題として特に非難される要素は存在していない。選手は勝つために事前と現場とを問わず相手を分析する。この分析は相手の「弱点a」を見つけ出すためである。また選手は誰でもが自己の「弱点a」を無くすための努力を怠らない。この経緯は相手から自己の「弱点a」を攻められることを当然のこととして了解しているからなのである。一般的に対面型スポーツにおいて相手の「弱点a」を攻めることは勝利の方程式の基本的要素を構成している。この場合、逆に、相手の「弱点a」を攻めることができなかつたり、見つけ出すことができなかつたりしたら、競技者としての資質を問われることになる。

次に「弱点b」についてである。両者ともに目立った「弱点a」をもっていないケースを想定してみる。この場合、試合の勝敗は、上手に相手の「弱点b」を誘い出したり作り出したりして、そこを攻めるかどうかによって左右されることになる。こうした状況においては「弱点b」を攻めることなしに勝つことはできないので、この行為は非難されることもないのである。この場合、逆に、相手の「弱点b」を攻めることができなかつたり、状況を作り出すことができなかつたりしたら、競技者としての資質を問われることになる。

具体的に言えば、テニスで、相手の「いる所」へしかボールを打ち返せない人は競技としてのテニスをプレーすることを本来的にできないことになる。また相手がガードを固めているところしか殴れない人は、ましてや「人」を殴れない人は、いくら卓越した技能を潜在的に持っていたとしても、ボクサーになることさえできない。つまり、こうした逆説的な場合には、テニスやボクシングなどの競技に参加することができないのである。

川谷はこうした状況を総括して次のように要約する。

(学問的に) おもしろいのは(対面型) スポーツを実践するためには単に基本的な身体能力だけではなく、相手の弱点を攻めるという「姿勢」と「態度」のようなものが絶対に不可欠だということです。そしてこの姿勢や態度が競技者を競技者として成立させているのだとすれば、これこそが競技者として最低限求められるスポーツマンシップなのではないでしょうか。(川谷・p. 23・括弧内傍点付補注及び傍点引用者)

この川谷の定義する必要最低限の「スポーツマンシップ」としての資質が欠けている「人」は競技者になれない。しかし、こうした資質が欠けていたとしても、日常生活において道徳的に問題視されることはない。だからスポーツマンシップという言葉を使用する際には、あまりにも当たり前のこととして、この「川谷定義」を誰もが持ち出さないし意識にのぼらせることもない。このように分析する川谷は次の注意を促す。

普通の意味での道徳とは何の関係もないこうした原理に参加者が従うことによって始めて、対面型スポーツが成立しているという当たり前の事実、これは、スポーツを哲学的に、つまり純粋に、原理的に考えるにあたって常に念頭に置く必要があります。(川谷・p. 24)

本稿の追求する「問題」は「相手の弱点を攻めることは卑怯なことなのか」という問いであった。本稿におけるこれまでの議論では、川谷議論に導かれて、この「問題」に対しては「否」の解答を得た。すなわち、「弱点a」であれ「弱点b」であれ、競技において「相手の弱点を攻める」ことは不可欠の「正当な行為」なのである。

問題設定への解答＝競技者の立場(「内」の問題)からの「ものの見方」では、もちろん競技ルールの許容範囲において、「相手の弱点を攻める」ことは競技を成立させるために不可欠の「正当な行為」であって、「卑怯

なこと」ではない。

ここに、本稿は、本稿の出発点であった「問題設定」への一応の解答を得た。それでは、なぜに、「相手の弱点攻めることは卑怯なことなのか」という「問題」が、これまでの議論で「アンチ＝ラッシュワン」論においても取り上げられたように、問われることになるのか。本稿の次の課題はこの「なぜに」の解明にある。

そこで本稿では、引き続き川谷議論に導かれて、対面型スポーツにおける弱点を攻める「姿勢」や「態度」という原理について、すなわち「スポーツマンシップ」の原理について、その「原理」を成立させるものは「何なのか」という問題を考えてみる必要がある。対面型スポーツにおいて「相手の弱点を攻める」ことは、競技者にとって、非難されるべきことではなく、むしろ原則的に追求すべき命題なのである。それでは競技者は「なぜ相手の弱点を攻める」のだろうか。この「なぜ」を明確にしておかなければならない。それは、「勝利を得るため」(川谷・p. 24)である。この川谷指摘を当たり前のこととして受け流してはならない。弱点を攻めることは「勝利の方程式」の定石である。言い換えれば、「相手の弱点を攻める」ことの「できない人」は、大原則の「勝利を得るため」に「ベストを尽くしていない」と考えてよいことになる。次に本稿では、「勝利の追求」という側面から、あらためて「スポーツマンシップ」の問題を考えてみる。

#### 4-5 勝利の追求とスポーツマンシップ

まず川谷議論を整理しておこう。

弱点を攻めるという原則は、こうして勝利の追求という大原則の下に包摂されます。勝利の追求という上位原理に対して、弱点を攻めるという原則は下位原理です。ですから、勝利の追求という大原則は、対面型スポーツだけではなく、非対面型スポーツ、したがっ

てスポーツ全般にあてはまります。(川谷・p. 24・傍点引用者)

ここまで、本稿も川谷議論も、「弱点を攻める」ことに焦点を合わせて検討してきた。そこで川谷議論は、前述の問題設定に戻って、次のように視点を拡大することになる。

非対面型スポーツにおいては、(直接的に)相手の弱点を攻めるという原理は、対面型スポーツにおけるような重要性を持ちません。(しかし、心理的な圧迫を相手にかける駆け引きとしてはこの「原理」が非対面型スポーツにおいても有効に働く。)そこではむしろ、自分のパフォーマンスを磨くという原則の方が重要視されます。もし、スポーツマンシップを「競技者としてあるべき姿」を指し示す言葉と考えるならば、勝利の追求という大原則は、もっとも基本的なスポーツマンシップであると言えるでしょう。(川谷・pp. 24-25・括弧内補注及び傍点引用者)

ここで、本稿では、下記のように勝利の方程式の構成要素に関する議論を整理しておく。

下位原則＝相手の弱点を攻めることは勝利を追求するために認められる行為である。

上位原則＝競技は勝利を追求することにおいて成立する。

大原則＝勝利の追求はもっとも基本的なスポーツマンシップである。

さてこの大原則に対して川谷が次のような問題提起を一般論から集約して投げかける。

じゃあ勝つためには何をしてもいいのか。そうではないはずだ。きちんとルールを守ったうえでないと、ルールを平気で破って勝っても(註)決してスポーツマンシップに則しているとは言えない。(川谷・p. 25・傍点及び括弧書き引用者)

註＝この問題提起の傍点部分「ルールを平気で破って勝っても」の表現(記

述)内容は、一般的な会話などにおいて聞かれることがあるとしても、競技ルール上の厳密な意味においては事実無根の誤解である。あらゆる競技においてルールを平気で(故意に)破れば状況に応じて罰則規定が適用されて失格(退場)に処されて勝者にはなれない。

この問題提起を契機にして、川谷の議論は、先に設定した「アンチ＝ラッシュワン」論の再援用という展開になる。その際、川谷は、「スポーツをする人＝競技者＝当事者」にとっての基本的なスポーツマンシップの二本柱をあらためて定める。

第1の柱＝「勝利の追求」は競技者の基本的なスポーツマンシップの要因である。

第2の柱＝「ルールの遵守」は競技者の基本的なスポーツマンシップの要因である。

議論を整理し直すならば、前述引用のアンチ＝ラッシュワンに見立てられる森川漫画の「鷹村選手」の行為は、それが「ルール違反」であることを理由として観客から非難されたのではなく、別の理由で非難されたのであった。この「別の理由」を川谷は重視する。

要するに…(アンチ＝ラッシュワン論などの議論は)…、ルールには従っているがスポーツマンシップに反すると普通(観客の立場・「外」からの視点)見なされる行為に照準を絞っています。そしてこの問題は、ルールに関する考察によっては決して解消することができない、独立した問題です。(川谷・p. 27・括弧内補注引用者)

このように問題点を整理するならば、第1の柱である「勝利の追求」という大原則のもとに「相手の弱点を攻める」ことは、ルールに違反しているのではないのだから、何の問題もないはずである。そうだとすれば先に川

谷議論の事例として取り上げた「山下選手の右足」も「イーグル選手の右目」も「弱点a」に該当することになる。したがって対戦相手である「アンチ＝ラシュワン」や「鷹村」は、山下とイーグルの弱点を攻めたとしても、問題ないはずである。しかも、「両者」は第2の柱「ルールの遵守」にも違反していない。それでは、なぜに、観客としての「外」の目は、「アンチ＝ラシュワン」と「鷹村」をスポーツマンシップに反すると決め付けるのだろうか。ここにおいて川谷は、この「なぜに」に答えるために、前述の「3つの見解」の問題を適用して議論を進める。

観客（「外」の視点）の立場からの1つ目の見解「弱点を攻めるのは卑怯で、スポーツマンシップに反する」は、スポーツマンシップを定義する「ルールの遵守」と「勝利の追求」という原則からすれば、当てはまらないことになる。むしろ基本的なスポーツマンシップの大原則からすれば、第1の見解は、否定されなければならない。

それでは、1つ目の見解と正反対の立場にある、この場合は競技者（「内」の視点）の立場としての、3つ目の見解「競技者は勝利のために積極的に弱点を攻めるべきだ」は正しいのだろうか。もしもこの第3の見解が正しいのであれば、「アンチ＝ラシュワン」と「鷹村」の行為は正当化される。それだけでなく、反対に、現実の「ラシュワン選手」は山下選手の「右足」を攻める「べき」であったし、森川創作の「イーグル選手」も鷹村選手の「左目」を攻める「べき」であったにもかかわらず、スポーツマンシップの大原則からすれば、そうしなかった「彼ら」は非難されるべきだということになってしまう。

ここにおいて、現実的に「ラシュワン」がとったとされている態度や森川創作の「イーグル選手」にとらせた態度である2つ目の見解「できるだけ弱点を攻めずに勝つのが競技者としてベストだ」について考えてみる必要が

ある。対面型スポーツにおいては、相手の弱点を攻めることが勝利の方程式を解くため（勝利をおさめるため）の最も確実な手段であることを先に検証してきた。しかもこの「検証」がスポーツマンシップの大原則に裏打ちされていることも先にみてきた。そうであるならば、「ラシュワン選手」や「イーグル選手」のように「敢えて攻めない」競技者の目的は何なのか。川谷はこの「何か」についてさらに問題を設定して次のように問う。

（この場合）相手の弱点を「敢えて」攻めない競技者には、単なる勝利よりも何か大事なものがあるはずです。それは何でしょうか。少なくとも3つ考えられます。パフォーマンスの卓越性、情け（思いやり、同情）、名誉です。これは果たしてスポーツにおいて勝利よりも上位に置かれるべき価値なのでしょう。か。（川谷・p. 27・傍点引用者）

こうして川谷議論と本稿は「価値論」の問題を考え併せて考察を進めることになる。

#### 4-6 勝利よりも大切なもの

まず、第1番目の「パフォーマンスの卓越性」について川谷は次のように考える。

技能の卓越性を示したいというのは、競技者の当然の欲求です。しかし、スポーツは、ただの個人的なパフォーマンスの誇示ではなく、それは他者と競うことによってはじめて成立します。試合とはまさしく、どちらの技量が上かということを試す場です。……勝利こそ最高のパフォーマンスなのです。（川谷・p. 27・傍点引用者）

そこで、この「勝利こそ最高のパフォーマンス」という原理から、川谷は、「勝利の追求」よりも「パフォーマンスの追求」を優先させる競技者は「基本的なスポーツマンシップ」に反しており論理的に「そもそも試合に参加すべきでない」とみなす。

第2番目の「情け」の問題については、「そのために相手の弱点を攻めないとすれば、競

技者としては失格」(p. 27)であると川谷はみなす。これは先に検討してきた勝利の方程式の下位原則「相手の弱点を攻めることは勝利を追求するために認められる行為である」に相反することから論理的に「基本的なスポーツマンシップ」に反するという見方である。

第3番目の「名誉」の問題について川谷は次のように考える。

名誉を嫌いな人はいないと思いますが、名誉を勝利に優先させること、名誉なき勝利より名誉ある敗北(honorable defeat)を選択することもまた、競技者としてはあまり名誉なことではありません。スポーツにおいて競われるべきは名誉ではなくて、あくまでも身体能力の卓越性なのです……。 (川谷・p. 28・傍点引用者)

そうだと考える川谷は競技における最高の名誉は勝利以外に存在しないと見定める。

上記のように、「敢えて攻めない」のは「何か」の自問のために、川谷の想定した「パフォーマンスの卓越性」「情け」「名誉」という「3つの理由」は論理的に退けられた。そして、川谷は、次のように勝利の方程式としての「大原則」論をまたもや持ち出す。

もちろん、競技者は、試合においてパフォーマンスや同情や名誉といった、これらの価値を追求することは(個人の自由裁量で)できます。しかし、それは勝利の追求という大原則の範囲内でのみ、限定的に許されることです。これらの価値を過大に評価して勝利よりも優先させ、勝利を二の次にした瞬間に、競技者としての本分を手放すことになります。(川谷・p. 28・括弧内補注及び傍点引用者)

川谷は、「競技者」にとっての「大原則」は「勝利の追求」にあることを、ここに取り上げた上記の議論を補強材として、あらためて確固たるものに見定めたのである。

やはり、「勝利の追求」は競技者にとって目的とすべき当たり前の原理なのだが、その当たり前の大原則を何にもまして競技におけ

る「第1原理」として認めるためには、「競技」と「スポーツマンシップ」との関係をもう一度掘り下げて確認しなければならない。

それでは「競技」は何のために行われるのかという問題から整理してみたい。

勝敗の決定、「強さ」の比較は、競技そのものによって達成されるべき価値です。現実的競技に、人(スポーツを観る人=観客者=外部者)はそうした価値を見出します。……私たちは自分の強さや他人の強さを知りたがる生き物です。……要するに、「外」からの視点としての)競技そのものによって達成されるべき価値と、競技者(スポーツをする人=当事者)によってその内部で追求されるべき価値は異なるのです。前者(競技の価値)は勝敗の決着(競技の経緯・強さの比較)であり、そのかぎり(結果としての)勝利と敗北は(主として観客者にとっての)価値において同等(たとえば勝負に負けて相撲に勝ったという敗者を讃える外部者の見方もある)ですが、後者(競技者の価値)はあくまで勝利です。そしてさらに大事なことは、前者の価値を達成するためには、競技者は勝利以外の価値を追求すべきではないということです。後者(競技者)の価値(勝利)の追求は、前者(競技)の価値の達成の不可欠の条件です。(川谷・pp. 62-63・括弧内傍点付補注は引用者)

川谷は、この議論をもって、「競技」と「競技者」と「スポーツマンシップ」との関係における定義を次のように明確に整理する。

スポーツマンシップとは、競技そのもの(の目的に期待されるべきこと)ではなく、競技者の従うべき原理です。そして、その大原則は、勝利の追求です。競技者は、勝利を、そしてそれだけを追求することを通じて、勝敗の決着という競技そのものの目的の実現に寄与しうるのです。……したがって、勝利の追求とは、(論理的に分析してみれば)競技という営みそのものがその参加者に対して要



請する第1原理だったのです。(川谷・p. 63・括弧内補注及び傍点引用者)

さて、「勝利の追求」そのものが、「競技」そのものの要請する第1原理であって、しかも「スポーツマンシップ」は「競技」そのものに求められている規範ではないのであるから、この議論をもって、本節の題材「勝利よりも大切なものとは」の問いの答えは「存在しない」ことになる。つまり、競技者にとって「勝利よりも大切なもの」は無いのである。この川谷議論は、一言に要約すれば、「競技そのものの目的」と「競技者の目的」とは「厳密に区別しなければならない」ことを示唆している。別の言葉に言い換えると、「スポーツ」の目的と「スポーツマン」の目的とは別の次元であるということなのである。

さらにもう1つの示唆は「競技」そのものは純粹無垢であるということである。先に本稿では、「スポーツ」と「スポーツマン」と「スポーツマンシップ」について、語源にまで遡って、それぞれの意味を検討してきた。そして「意味」は時代とともに変化してきていることをみてきた。その場合、「意味」とは、「スポーツ」と「スポーツマン」と「スポーツマンシップ」のそれぞれに内在する本質ではなくて、「外」から課題として付与されたものであった。そこで注意すべきことは、これまでの議論における川谷指摘と同様に、「スポーツ」と「スポーツマン」と「スポーツマンシップ」とについても、そのもの自体に内在している「本質」の問題と、この3つの言葉に付与されて外在的に問われている「意味」の問題とを厳密に区別しなければならないことなのである。その混同のあるところに本稿の問う「スポーツマンシップ」の本質と「スポーツ」の本質は見えてこない。そこで検討を深めるために、川谷議論の助けを借りながら、もう少し議論の題材を原理的に広げて設定しておきたい。

通常の(世間=「外」で問われるところの)

スポーツマンシップは、(実際の)スポーツ(現場「内」)においてはニヒルで反自然的な価値(道徳的価値)です。これに対して、勝利はスポーツ(の現場=「内」)においてリアルで自然的な価値です。普通はスポーツ(現場)では、リアルな価値=勝利を手に入れた者が(世間=「外」からも)評価されますし、その場合はこの序列(「リアルな価値=勝利」と「反自然的な価値=道徳的価値」との序列)が逆転することはありません。(川谷・p. 32・括弧内傍点付補注引用者)

しかしながら、先に見てきた「ラシュワン」の事例のように、例外もある。「ラシュワン」は、結果的に「リアル(自然的な)な価値=勝利」を手に入れることはできなかったが、「道徳的な価値=反自然的な価値」を手に入れて、「スポーツを観る人=観客=部外者」から、称賛されることとなった。この経緯を、川谷は、リアルな価値と道徳的な価値の逆転とみなす。それでは、なぜ、このような矛盾が起こるのであろうか。

それは、スポーツ現場においても時と場合によって要求されることもある「道徳的価値」が、スポーツの外部では、人間性の問題を問う価値に結びついているからなのである。そこで、スポーツにおける「リアルな勝負」に敗北したとしても、「ラシュワン」のケースのように、スポーツの外部における「名誉」などの道徳的な価値評価がなされて、間接的に「勝者」と同列もしくはそれ以上にみなされることが起こりうる。

しかし、この「同列もしくはそれ以上」の問題は、すなわち道徳的な価値の問題は、はたしてリアルな価値としての「勝利」よりも大切なものなのだろうか。本稿の議論からすれば、先に競技者において「勝利よりも大切なものは無い」と定義づけたのであるから、回答はもちろん「否」である。しかし、この道徳的な問題は、常に競技者の葛藤としてつきまとう。次に本稿は「競技者の葛藤」の問題

について議論を試みたい。

## 5. 競技者の葛藤

スポーツは、現実世界から空間的にも時間的にも区切られ、独自のルールに基づいて行われる、日常生活とは異なった、非日常的な営みである。このように前提条件のもとに、川谷は、だからこそ、日常の道德としては認められない行為も、逆にスポーツの内部では奨励されるとみる(川谷・p.33)。しかしながら、川谷は、スポーツも現実世界の一部であって、日常の出来事と接点を持っていることに注目する。

競技者も競技が終われば、常識道德を基本原理としている日常生活に戻ります。したがって、日常道德のレベルにおける勝ち負けスポーツにおいてはニヒルだが、道德レベルではリアルな価値を巡る闘争<sup>一</sup>は、競技者にとってもまったく無関係というわけには、じっさいはいきません。(川谷・p.33)

競技者もまた「日常」と「非日常」を行き来する。その経緯が「競技者の葛藤」を生み出すことになる。つまり、競技者として「純粋に勝利というリアルな価値を追求するのか」、それともこの問題を度外視して、日常生活において「リアルな道德的価値を手に入れるのか」という葛藤の問題について、川谷は、議論を深める。そして、この問題は、勝利の方程式に全面的に依存すべきスポーツ現場においても、競技者の「心の揺れ」として表れてくる。まず、この問題に関わって、競技者の「本分」の問題を考察してみたい。

### 5-1 競技者の本分

実際に競技を行う場合、上記にみてきた「葛藤」は、競技者のパフォーマンスを低下させることがある。勝利を追求すべきか。現実世界から称賛されるはずの道德的価値を追求すべきか。この2つの目的の間を交錯する葛藤が往々にして競技者のプレーに反映され

るからにはほかならない。こうした状況を川谷は論理的に次のように解釈する。

ここにおいて、自然と反自然、あるいは所与と課題が反転します。勝利という(スポーツする人「内」から捉える)価値は競技者としての競技者にとってはリアルで自然な価値ですが、日常道德を気にせざるをえない道德的存在者としての競技者にとっては、ニヒルで反自然的な価値です。逆に通常の(スポーツを観る人「外」から捉える)スポーツマンシップにおいて喧伝される道德的価値は、競技者としての競技者にとってはニヒルで反自然的な価値ですが、道德的存在者としての競技者にとってはリアルで自然的な価値です。(川谷・p.34・括弧内補注引用者)

この論理からすれば、競技者は、競技者の「勝利の追求」という「本分」を忘れることで、実際の試合においても、パフォーマンスや同情や名誉に関する日常的な道德的問題上の価値を入手することも仮定法としては可能になる。しかしながら、この場合、競技者の本分としての勝利の追求を怠った瞬間に、それはもう、競技者の本分を放棄したと見なされても仕方がないのではなかろうか、と川谷は問いかける。

先に引用した「ラッシュワゴン選手」や「イーグル選手」の行為は、まさにここに指摘するように、競技者としての本分を自らが放棄しているのではないか。したがって、前述の「2つ目の見解」としての「できるだけ弱点を攻めずに勝つのが競技者としてベストだ」という考え方の場合は、単に「勝利」という目的だけでは満足できずに、「何か」をプラスして求めることになってしまう。その「何か」こそが上記に指摘した「日常的な道德的問題上の価値」であって、この「何か」を求めることは、競技者の本分を放棄していることになるのである。この議論から「2つ目の見解」は正しくないという結論を本稿は得た。

残る議論は、「3つ目の見解」としての「競

技者は勝利のために積極的に弱点を攻めるべきだ」という考え方についてである。本稿におけるこれまでの議論においては、勝利の追求という大原則のもとに、積極的に相手の弱点（先に示した「弱点a」または「弱点b」のいずれのケースであっても）を攻めることが特にボクシングなどの「対面型スポーツ」において特徴的に観られる「競技者の本分」であるという見解を確認してきた。ところがスポーツマンシップという言葉は、一般的に、この競技者の本分とは直接に関係のない価値規範として使用されているのである。私たちが普段よく耳にする「正々堂々」とか「礼儀正しく」とか「協力し合って」といった主として「外」から問われる徳目がこの際の第二儀的なスポーツマンシップの事例として該当している。これに対して本稿の議論してきた、競技者にとって第一義的にまた直接的に求められるスポーツマンシップとは、もちろんルールの遵守を大前提にしてのことであるが、「勝利の追求」という「競技参加態度」である。このように議論を整理する川谷はこの経緯を比喻を使って明快に定義する。

（相手の弱点を攻めることを放棄して）「勝利を追求しない競技者」という概念は「丸い四角」という概念が（成立しないことと）同じように矛盾しており、したがってそんなものは存在することができません。（川谷・p. 29・括弧内補注引用者）

したがって、本稿では、スポーツにおいて「勝利を追求しない競技者は存在しない」という立場をとることにする。

一方で、日常道徳的な意味でのスポーツマンシップの欠如している競技者が、つまり日常的に「卑怯で」「無礼で」「協調性の無い」といった生活態度の競技者が、競技場において、ここに取り上げている「競技者の葛藤」という問題からも解放されていて、第三者から指弾されることもなく安穏とプレーしていることが現実問題として確認できる。したがっ

て、競技者の本分と考えられやすい「スポーツマンシップという言葉」の問題は、普通の意味での「道徳的な人格」の問題とは別の次元の原理であって、競技者としての「あるべき姿」と、日常的な人間としての「あるべき姿」とは必ずしも一致していないことを私たちは認識しておく必要がある。さて、相手の弱点を攻めることは、日常的人間にとって反自然的な行為である。しかし、競技者にとっては「そうでない」のである。本稿では、この「不一致」の問題を見逃すことなく、「3つ目の見解」すなわち「競技者は勝利のために積極的に弱点を攻めるべきだ」は正当な考え方であることを確認しておく。

次に本稿は、競技者の葛藤についてさらに考察するために、「戦略の問題」に注目する。

## 5-2 戦略の問題

ボクシングのような対面型スポーツでは「相手の弱点」を戦略的に攻める。陸上競技のような非対面型スポーツにおいても、戦略的にライバルの不利な立場を意図的に作り出すために、レース中にさまざまな妨害まがいなことを行う。

むしろ、競技者として純粋に勝利を追求するためには、普通の人間としては「えげつない」「尊敬できない」行為をも平気で遂行する（ある意味で特殊な）能力・技能を必要とするのではないのでしょうか。（川谷・p. 29）

だから議論が次のように展開する。対面型スポーツでは相手の「裏をかく」「穴をつく」「意表をつく」「だまし討ちをする」といった行為を意図的に選択しなければ勝利を手中にできない。すなわち勝つためには、日常的にみて反道徳的とも受けとめられがちであるものの、相手の「よいところ」を「できるだけつぶす」また「ださせないように邪魔する」といった戦略が勝利の方程式のために不可欠なのである。

また、「勝利を追求する」ために「ベスト

を尽くす」という「スポーツマンシップ」は競技者にとって当たり前の姿勢であって、この徳目は取り立てて戦略の条件として取り上げるまでもないことである。しかも、この「ベストを尽くすというスポーツマンシップ」は誰もが「いつの間にか身につける」ものなのである。しかし注意すべきことは、競技者は「ルール」を熟知すればするほど、たとえば「裏をかく」といったような「有利な戦略」を無意識的に選択する「技量」を自然的に身につけてしまうという経緯がある。ここにも、日常道徳で律することのできない、競技者の特性がある。

一方で一般的に問われる常識的なスポーツマンシップとは競技者にとってまさしく困難な課題となる。理由は、たとえば「裏をかく」のは悪いとする一般的な徳目は、「スポーツの外部」から押し付けられた価値であって、競技を成立させるための根本的な徳目「勝利の方程式」には組み込まれていないからである。しかもこの一般的な価値徳目の追求は勝利の追求と矛盾をきたすことがある。つまりスポーツを勝利の方程式に則して純粋に遂行するとき、そして競技者が勝利を追求するのであるならば、どうしても「えげつない」「尊敬できない」行為をも選択せざるをえない局面がパフォーマンスにおいて立ち現れてくる。この経緯からすれば、常識的に語られている「スポーツマンシップ」という言葉の意味を、競技者に適用すること自体に問題があることになる。それではスポーツにおいて「正々堂々と闘え」という徳目がなぜ一般的に取り上げられるのかという問題に立ち入ってみたい。

この問題に関するスポーツ研究者の興味深い「指摘」(勝部・1981・p.189)を見つけたことができた。競技者が「勝つこと」だけに価値基準を置くならば次のような危惧が派生するという指摘である。

①心理的に抑圧が強まり、物事に鈍感で、

強烈な自己中心的なパーソナリティになる。

②勝つための駆け引きが優先され、最善を尽くすことよりも、相手を叩き潰すことだけに関心が向く。

③試合、競技に「ごまかし」が多くなる。

④競争意識が異常になる。

⑤あまりにも大きいストレスから逃れるために、麻薬、アルコール、ホモセックスなどに脱線するスポーツ選手が多い。

私は上記に箇条書きで示した「反勝利至上追求スポーツ論」をみつけたとき衝撃を受けた。この「スポーツ道徳論」を、これまでの検討を糧にして、次のように読み取ったからである。競技者は「勝利の追求」にこだわるならば人格が荒廃してしまう危険性に囲まれている。だから、競技者は「人格高潔である」べきだとわざわざ強調しなければならない。そのまま放置しておいたら競技者は誰も「正々堂々」と闘うはずがない。だから、競技者は、わざわざ「正々堂々と闘います」と宣言しなければならない。このように読み取った私は、専門のスポーツ研究者たちが、自らを否定しているように思えてならなかった。この勝部「反勝利至上追求スポーツ論」は、スポーツ研究者たちによって宣言される「スポーツで人間形成・人間性を高める」という目的論との混同のもとに、上記に本稿で検討してきた「戦略」としての「勝つための駆け引きが優先される」ことまでをも否定するという誤った価値規範を持ち込んではいないか。

この勝部指摘の問題は、競技を成立させるための不可欠なスポーツマンシップとしての「勝利の追求」の次元において求められるものでなく、日常道徳的なスポーツマンシップの次元において問われることであって、川谷指摘を借りて整理するならば、競技者にとって「反自然的な強制」として作用することになる。極論すれば、リアルな価値を求める競

技者の戦略にとって、「卑怯」「えげつない」などと外部から判断されようとも、その評価自体は無関係のことなのである。したがって、俗に言われる「スポーツマンは清廉潔白」「スポーツは清く正しい」という外部的規範は、時と場合に応じて、真実でないという局面をみせることもありうるのである。

本稿では、競技者の戦略上の問題を通して、「スポーツする人＝競技者＝当事者」が「内」の問題として追求すべきスポーツマンシップと、「スポーツを観る人＝観察者＝外部者」が「外」の問題として追求しているスポーツマンシップとの間には、矛盾があって、同次元で比較できない徳目のあることを確認してきた。本稿では次にこの「矛盾」について、競技者に課せられている「試練」という立場から検討してみる。

### 5-3 競技者に課せられた試練

競技者にとって、常識的な道徳的観点に立つかぎり、「なにがなんでも勝たねば」という目的を優先させて純粋に勝利を追求することは、非常に困難な「試練」となる。

道徳的常識人にとっては、競技者であることそれ自体が「所与」ではなく「課題」なのです。競技者であるためには、道徳的常識人にとってリアルな道徳的価値を放棄しなければならないことがあります。(川谷・p.34)

川谷は、この「課題」の克服という競技者に課せられた「試練」について、前述の「アンチ＝ラッシュワン」としての「鷹村選手」の事例を取り上げて次のように考察している。すなわち、勝利の追求を大原則とする純粋な競技者であることによって、常識道徳のレベルでたとえ非難されたとしても、またそのことで世間から「卑怯」だと白眼視されるような不利益を蒙ったとしても、それを覚悟した上で、「鷹村選手」は、この「課題」つまり「試練」を競技者の本分「勝利の追求」をまっとうすることによって克服したことになる。

この場合の「外」からの観察者にとって、「鷹村選手」の立場を目指す競技者は、自然に「卑怯」にふるまってしまう自我を抑えられない競技者とは異なって、自覚的に敢えて正々堂々と自ら選んだ「卑怯」を戦略としたのであって、この姿勢と態度には、むしろある種の「潔さ」さえ覚えることにもなる。実は、この「卑怯戦略」を果敢に選択する純粋に勝負の世界に生きる競技者の姿を観て、「とてもついていけない」と感じると同時に、ある種の「畏敬の念」を覚えることがあるのは、競技者が、単なる道徳的常識人としての「スポーツを観る人＝観察者＝外部者」には到底克服することのできない「試練」を乗り越えているからなのである。川谷はこの経緯を次のようにまとめる。

私(川谷)が、通常のスポートマンシップではなくて、勝利の追求というスポートマンシップを(競技者でもないのに)わざわざ称揚したくなるのは、こういった場面です。はじめに「所与」として現れたスポートマンシップが、新たに困難な「課題」へと反転したときです。通常のスポートマンシップにせよ、私が提示したスポートマンシップ(勝利の追求)にせよ、とにかく何かをわざわざ称揚するという行為は、それが「所与」でなく「課題」として捉えられていることを示しています。(川谷・p.35・括弧内傍点付補注引用者)

さらに川谷は勝利の追求という大原則としてのスポートマンシップと「試練」との関係を次ぎのように整理する。すなわち純粋な競技者は、この経緯について、そもそも「試練」として意識することなく、それを単なる「所与」として受けとめているのかもしれない、と川谷は受けとめる。そして、勝利の追求というスポートマンシップを大原則として位置づけることも、もしかしたら意味の無いことかもしれない、と川谷は自問する。なぜなら、競技者にとって勝利の追求が第一義的であるということは、当事者としての競技者にとっ

ては「所与」としての事実であるからである。こうして川谷議論は、勝利の追求という大原則の正当性が、所与として当たり前のことであるという「事実性」の証明も含めて、競技者の追求すべきスポーツマンシップの大前提であることを論理的に証明したことになる。しかし、それでは、先に本稿の取り上げた「伝説」の問題はなぜ起こるのかという議論が依然として残ることになる。本稿では次にこの「伝説」の問題を再び検討する。

## 6. 伝説はなぜ生まれるのか

ここでは、「ものの見方の闘争」と「伝説の虚偽性」という、結果として互いに関連することになる、2つの問題を検討する。この検討を通して「伝説はなぜ生まれるのか」という問題について考えてみたい。

### 6-1 ものの見方の闘争

川谷は、「異なる観点同士の闘争」(pp. 35-38)を設けて、当事者と外部者の「観点」(ものの見方)の相違の問題を整理する。

(これまで議論してきた)イーグルvs鷹村戦(の話)に戻りますと、弱点を攻めるのが「卑怯」だという人(観客)と、いやそれは「本道」だという人(ボクサー)は、同じ行為をまったく異なる観点から評価しているわけです。前者は道徳的・常識的な観点、後者は競技者の観点に立っています。そして、どちらの観点に立つかは自由ですから、どちらが正しいとは言えません。私たちは、純粋に道徳的な観点から、勝利を追求するために相手の弱点を攻めるといふ競技者の本分そのものを否定することだって、やろうと思えばできます。(川谷・pp. 35-36・括弧内傍点付補注引用者)

そして、川谷は、議論を次のように続ける。スポーツそのものの「内」には、「鷹村選手」の行為を否定する根拠は何も無い。したがって、それを否定する「外」の人は、「スポー

ツ」の「外」にある「何かの原理」に依拠しているのである。たとえば「暴力の否定」を信奉する特定の宗教が「格技」などのスポーツ参加を禁止している事実がある。そして信者は、時として「競争原理の否定」を信奉するがために、たとえば「体育」の授業への参加を拒否するという事実もある。こうした事例においては、川谷の指摘する「何かの原理」とは、「暴力の否定」であったり「競争原理の否定」という宗教的原則である。

異なる観点同士の対立は、それを包括しうる、より高階の観点が見出されないかぎり、闘争へと転化せざるをえません。世俗と宗教とを包括しうる観点が存在しないのと同じように競技者という観点と道徳的な観点の両者を包括しうる観点は、おそらくありません。(川谷・p. 37)

これまで議論してきた「スポーツマンシップ」をめぐる理解の対立の根底には「競技者の観点(内の問題)」と「道徳的な観点(外の問題)」の間の「闘争」が存在している。そこでこの闘争の狭間にあの「松井伝説」や「明德義塾高校伝説」や「山下伝説」や「ラッシュワン伝説」が生まれるのである。川谷はその経緯を次のように論理的に説明する。

そしてこの闘争において、(外から)スポーツを論じる人々(有識者、マスコミ)は、ほぼ例外なく道徳的観点の陣営に馳せ参じます。というのも、道徳的観点はスポーツにとってはニヒルな道徳的価値に依拠しており、放っておいたらリアルな価値(勝利)を追求する側(当事者としての内側の論理)に負けてしまうので、(付和雷同して闘争に勝つために「伝説」をでっち上げたりして外部へアピールするための)応援団を必要とするからです。(川谷・p. 37・括弧内傍点付補注引用者)

だから、あの「外」側の期待論としての「ラッシュワン伝説」が応援団効果を発揮して一気に世界の関心を集めたのである。一方で川谷は競技者の立場も明快に整理する。

勝利を唯一のリアルな価値と見なす競技者にとっては、この闘争そのものがスポーツの外部におけるニヒルな闘争なので、普通、競技者自身は「勝利こそがリアルだ」などという当たり前のことを、(私のように)わざわざ主張したりしません。(川谷・p.37)

ここに、「スポーツをする人=競技者=当事者」(内)の「ものの見方」と「スポーツを観る人=観客=外部者」(外)の「ものの見方」の相違と闘争の所在を明らかにすることができた。本稿は、ここで、この「ものの見方の闘争」の問題に関わって川谷が示唆するもう1つの根本的な問題にも注目しておきたい。

もしこのニヒルな闘争において道徳的観点が勝利を収めてしまったら、スポーツはどんどん骨抜きにされ、気がついたらもはや現在のスポーツとは似て非なるものになってしまうかもしれない。(川谷・p.37)

現実には、ことの是非は別にして、アメリカでは学校スポーツとしての「ボクシング」は禁止されている。理由は「危険」だからという科学者(外)からの問題提起に拠っている。しかしこの「ものの見方の闘争」の問題についての考察は、次の川谷指摘にならって、ここではスポーツマンシップの問題を議論するための踏み台に留めておくことにしたい。

競技者の行動はしばしば常軌を逸しています。ロサンゼルスオリンピックの山下選手だって、冷静に考えれば絶対に決勝戦は辞退した方がいいのに、たった1つの勝利のために、たかが金メダルのために選手生命を賭けてラシュワン選手と闘いました(註)。ところが、この常軌を逸した行為を愚かだと非難する人は、不思議なことにあまりいません。たぶん、勝利のためにすべてを犠牲にするのがスポーツマンシップだということを、みんな実際には認めているのでしょう。(川谷・p.38・傍点引用者)

註=川谷は、このくだりに自ら脚注をつけて、「42. 195キロメートルを2時間やそこらで走る、マラソンという競技などは、それだけでも常軌を逸しているという見方もできます」と補足説明を試みている。「絶対に決勝戦は辞退した方がいい」「たかが金メダルのため」と言い切る価値判断は川谷の「ものの見方」である。そして、この「外」からの「ものの見方」は決定的に「山下」の「内から」の「ものの見方」と真っ向から対立している。「ものの見方」には、「内」と「外」との立場によって、このように、決定的に異なる場合もある。この事例は、本稿の主題である「スポーツマンシップをどのように捉えるのか」という「ものの見方」の判断においても、注意を喚起させてくれる問題である。

ここにみてきたように「ものの見方」は立場の相違によって闘争的に対立するものであるが、スポーツマンシップの問題に視点をおくとき、この「対立」に注目すべきである。

## 6-2 伝説の虚偽性

川谷は、スポーツマンシップの問題を考察するために、「『伝説』と『嘘』」(pp. 38-41)という節を立てて、この「ものの見方」の「対立」についてあらためて議論を始める。

ラシュワンとの試合に勝った山下は号泣します。もし伝説のとおり、ラシュワンが山下に情けをかけて右足を攻めずに闘ったとしたら、山下選手は果たして素直に号泣できたでしょうか。私にはそうは思えません。(川谷・p.38・傍点引用者)

川谷はこの「私にはそうは思えません」という問題について参考文献を頼りにして証拠探しを行う。参照物は「山下インタビュー記

事」「玉木正之著書」「漫画本」である。おそらく各種のインターネット検索もそこに加わったことだろう。

「いかに相手の弱いところに自分の一番強いものを持っていくかというのが基本です。……五輪の場に情けの気持ちを持つ人は、あの場には立てない」(山下談の川谷引用)

川谷は、この山下談話に絡めて、次のように論評する。

(山下は)相手の弱点を突くのは本道だと言った。(前述引用の)『はじめの一步』のボクサーと同じく、純粋な競技者の観点に立っています。(川谷・p.39)

そしてこの純粋な立場にいる選手は「もし相手から情けをかけられて弱点を攻められずに勝ったとしても、決して素直に喜べないはずです」とみなして川谷が推定する。ラッシュワン選手は実際には山下選手に「情け」をかけることなく、競技者として、普通に勝利を目指して闘ったのではないかと次の山下談話を下敷きにして川谷は推定する。

「……ケガした右足を気遣って、まったく(僕の)右(足へ)の技をかけなかったのは事実ではないと言えます。最後だって僕は(ラッシュワンが僕の)右(足を狙って)払い腰にきた(ラッシュワンの)足をさばき、左の払い腰をすかして、倒して抑え込みました。確かに(ラッシュワンは僕の)右足に技はかけているのです」(山下談話の川谷引用・括弧内補注引用者)

川谷はさらに推定を広げるためにスポーツライターの玉木正之「反論」を頼りにする。

「山下の痛んだ足を攻めた(蹴ったり払ったり)ところで、山下は倒れない。ただ、痛みが走るだけだ。最強の男・山下から一本をとるには、一本足で身体を支えている軸足を攻めるのが当然の戦術と言えるだろう」(川谷・p.39)

そして、川谷は、要するに「右足を集中攻撃するのは、愚策だ」とする玉木反論にも共

鳴する。私(稲垣)もインターネットで「山下泰裕-Wikipedia」を引いてみた。そして、世間では、山下の足をラッシュワンが「敢えて」攻めなかったと言われているのだが、次のような山下自白を根拠とする証言を見つけることができた。

「実際にはそのようなことは無く、ラッシュワンは山下の右足も攻めている。その後ラッシュワンがフェアプレーを意識して右足を攻めなかったという主旨の発言をし、それをマスコミが美談と報じたため、山下も本当のことを言えずに口を閉ざした。ただ最近になり山下もテレビでバンバン蹴られた(と発言するようになった)」(傍点引用者)

こうして、経緯を整理してみれば、「ラッシュワン伝説」は虚像であることが判る。では、真実は、何なのか。川谷は次のように整理する。

もっとも真実らしいのは、ラッシュワンは金メダルを目指して、必要な範囲で山下の右足を攻めつつ、勝つために普通に闘った。にもかかわらず、山下の弱味を自らの勝利に結びつけることができず、逆に押さえ込まれて負けた。山下は大怪我にもかかわらず一本勝ちを収め、その圧倒的な強さを改めて世界に示した。(川谷・p.40)

世間で取り沙汰されている「伝説」はどうか二重三重の「誤解」の産物であった。そうだと、川谷議論は、結論を引き出す。そして「伝説」であったにもかかわらず、ユネスコの「フェアプレー賞」を授与されたラッシュワン選手に関して、次のように語る。

(真実としてはスポーツの「内」で)普通に闘って負けただけなのに、ただ弱かっただけなのに、マスコミによってヒーローに祭り上げられたラッシュワンは、スポーツの「外」でリアルな価値(名誉という付加価値・フェアプレー賞という付加価値)をずいぶんと手に入れたことでしょう。(川谷・p.40・括弧内補注引用者)



ここに川谷の指摘する「リアルな価値」とはスポーツの「外」の問題である。川谷はこれまでの議論において「スポーツの内」の「リアルな価値」は「勝利」そのものに存在していることを大原則としてきた。だからこそ、柔道の谷亮子の談話「相手の怪我しているところを攻めてあげるのが、相手に対する優しさ」を「名言」と捉えて、川谷は、通俗的なスポーツマンシップよりも、この谷亮子「名言」の方に、「競技者としての凄み、ないしは高い道德性を感じる」のである（川谷・p. 40）。

しかし、伝説として語られる「スポーツそのものとはあまり関係がない『美談』が、なぜこれほど好まれ、一人歩きするのでしょうか」という疑問に答えるために、哲学者としての川谷は、「果たして勝利はほんとうにスポーツの内在的価値なのか、もっと大事な価値があるのではないか」という可能性を探るために次の課題にとりかかる。

## 7. 大原則の再吟味

勝利はスポーツの内在的価値なのか。もっと大事な価値があるのではないか。川谷は、この問題について、「大原則の再吟味」(pp. 44-46)と「卓越性理論と松井の五連続敬遠」(pp. 46-50)の2つの節における議論を主な観点として検討を進める。

(これまでの)結論は、勝利の追求こそもっとも基本的なスポーツマンシップ、競技者の本分だというものでした。これは言うてみれば当たり前のことなのですが、不思議なことにこの考え方は評判があまりよろしくありません。私たちには、勝ちにこだわり過ぎるのはあまりほめられたことではないという直感があります。(川谷・p. 44)

ここに言及する「本分」はスポーツの「内」の論理である。また「評判」は「外」の論理である。そして川谷は、上記にいう「直感」の存在根拠を、これまでの議論においても

「スポーツの外在的な要因としての日常倫理」に求めている。スポーツマンシップという言葉に対する見方の対立は、「人の嫌がることをしてはいけない、だまし討ちは悪いことだ」という基本的な対人倫理（常識道徳）という「外」の問題と、「勝利のために弱点を攻める」というスポーツ独特の原理（倫理）という「内」の問題との相克によって起こる、と川谷は再び整理しなおす (p. 44)。しかし、この当たり前の常識の再吟味は、ここでの「大原則の再吟味」という課題について哲学的に検討するために大前提となる問題なのである。

勝利を追求するという大原則をいろいろな仕方でも否定する人がいますが、彼らとて「勝利なんか追求してはならない」とまでは言いません。……彼らの主張は「競技者は（勝利を追求するのは仕方がないが）単に勝利だけを追求するべきではない」という点で一致します。(川谷・p. 46)

それでは、勝利のほかに、何を求めるべきかという問題が起こってくる。しかし「外」からの論理で求められるこの「何を求めるべきか」には、「内」からの大原則のように明確な特定の方向性が示されているわけではなく、川谷が指摘するように、スポーツの外側から理論武装された「さまざま」な「何を」の「答え」がある。その1つを例示して言う。

身体的卓越こそが競技者が目指すべき目的であり、勝利なんてその卓越性を追求する過程でたまたま獲得できたりできなかったりするものにすぎないんだ、だから勝利を第一義的に追求する方が本末転倒なんだ、そんなことをするから、基本的な技能を身につけずに小手先だけで勝とうとする輩がのさばるんだと言います。(川谷・p. 47)

川谷は、この「卓越性を追求する」という「何を求めるべきか」への答えを「卓越性理論」と名付けて、この卓越理論の検討に代表させて、「大原則の再吟味」の問題について議論する。その際、川谷は、前述の「松井伝

説」を再び持ち出す。

卓越性理論によれば、松井選手の五連続敬遠などという戦術は、「パフォーマンスの向上・上達や試合内容の質よりも勝利や個人の名声を優先する」「勝利至上主義」だと批判されます。(川谷・p.47)

この卓越性理論の特徴は、その他の「外」からの「ものの見方」と比べるならば、「スポーツの外から安易にスポーツを批判するのではなく」て、スポーツの「内側」の問題として「勝利至上主義を克服する原理」としての「新たなスポーツマンシップ」を問い直すとする独自性があると川谷は見定める(p.47)。しかし、実際に、そのような原理があるのだろうか。川谷は、その可能性の問題について、試合における卓越性の発揮の在り方を追求してみることによって検討する。

卓越性理論は自らの理論的根拠を、試合やゲームの本質に求めます。(この場合)試合の本質とは「最善をつくして相手より優れていることを示す」という点にあるといわれます。……(そうすると)例えば野球の故意四球(敬遠)は確かにルール違反ではないけれども、野球本来の打撃技能での卓越性の追求における勝負を放棄しているという点で、スポーツマンシップに反する卑怯な戦術だということになります。(川谷・p.48・括弧内傍点付補注引用者)

この経緯が、先に見てきた試合の「内側」で起こった「松井」対「明德義塾高校」の「五連続敬遠」問題における「外」からの判断としての明德義塾高校批判に現れた「卑怯論」の根拠になっている。しかし川谷は、この経緯をさらに別の視点から検討するために、試合における「卓越性の発揮」に関する重層構造を見落としません。

野球には確かに打者対投手という1対1の側面もありますが、基本的にはチームスポーツですから、チーム全体として相手よりどれだけ多く得点をとるかということを競うゲーム

です。……(この大原則からすれば)チームとしての得点能力(相手の得点を防ぐ能力)の卓越性こそが、野球において競われるもっとも基本的な卓越性であって、打撃技能や投球技能の卓越性は本来その部分的構成要素にすぎません。(川谷・p.48・括弧内傍点付補注引用者)

この川谷議論からすれば、明德義塾高校の戦略は、「勝つための当然の戦術」である。本稿は「相手の弱点を攻めることは卑怯なことなのか」という「問題設定」を大前提にして議論を進めてきたのであった。そして本稿では、その結論として、「卑怯でない」と「弱点を攻めることこそが競技の本質」であることを確認してある。この点からしても、川谷の見解を借りるまでもなく、松井の五連続敬遠は「相手の卓越性を消す」という当然の戦略として本稿の問う「勝利の方程式」に合致することが確認できた。

この合致の確認こそは、「相手の卓越性を消す」ことなくして「自らの卓越性を示す」ことは不可能である(川谷・p.51)という勝利の方程式の再吟味の問題にほかならない。

本稿では、この再吟味の作業をとおして、あらためて「相手の弱点を攻めることは卑怯なことなのではない」という本稿の議論の出発点であった問題設定の意義を再確認できたとし、その根拠となる、「勝利の追求こそもっとも基本的なスポーツマンシップである」ことの事実性を再確認することとなった。そして、この事実性こそが、「競技者の本分」であることと同時に「競技の成立のための大原則」なのであることも、また再確認できた。

## 8. まとめ

まず、本稿で問うてきた「スポーツ」とは「競技スポーツ」のことであって、したがって「スポーツマンシップ」とは「競技者」に問われる「姿勢」や「態度」に関する精神的資質のことであることを最初に確認しておき

たい。

これまでこの「スポーツマンシップ」という言葉については多くの研究が行われてきている。しかし、スポーツには、スポーツをする人の「内」側の問題と、またスポーツを観る人の「外」側の問題とが介在していて、その両者の「ものの見方」の立場性と可変性という問題が常に付きまってくる。こうした「内」と「外」の相克という事情のもとに、「スポーツマンシップ」の概念は、いまだに決定的な見解として確立していない。本稿はこの立場に着目して議論を展開してきた。

スポーツという言葉は、中世ヨーロッパにおけるその語源としての「気分転換・気晴らし」から発して、その後の時代背景と文化的伝播過程における事情に影響されてその「意味」を変化させてきている。スポーツマンシップの捉え方にしても、21世紀の現在なお、見解の一致を見出せていない経緯には、このスポーツの意味の変遷過程と同じ事情が働いている。すなわちスポーツにおいては、生活過程に展開される文化現象であるからその背景となる風土や時代的なものの考え方に影響されて、「スポーツをする人」という「内側」からの「ものの見方」と「スポーツを観る人」という「外側」からの「ものの見方」とにおいては、当然のことに見解の相違が生まれることになる。

本稿の目的は、この「見解の相違」の問題を念頭において、現代社会における「競技スポーツ」における「スポーツマンシップ」の捉え方の問題を検討してみて、「競技スポーツの本質」と「スポーツマンシップの本質」について一定の見解を提示するものである。

### 8-1 スポーツマンシップの意味の変遷

スポーツマンシップの意味の変遷とその要因は次のようにまとめることができる。

- ①スポーツマンシップはもともと「狩猟家の技量」を意味する言葉だった。

- ②19世紀の後半になってイギリスのエリート教育におけるスポーツの興隆にしたがって、スポーツマンシップには、スポーツにおける「競争的・競技的な活動に求められる技能や知識」及び「その活動をする際の人間としての精神的資質や礼儀作法などの態度や振る舞い」という意味が付加されることになる。イギリスにおいては、当時の道徳性や倫理性の象徴であった「騎士道精神」がスポーツマンシップの意味の付加過程に強く影響している。

- ③さらに、1896年の近代オリンピックの開始とともに始まったスポーツの国際化問題に併行してスポーツマンシップの意味の変遷もその影響を受けることになる。

- ④明治時代の日本へ、このイギリスの「騎士道スポーツマンシップ」が伝来し、日本の伝統文化「武士道」に影響されて、「武士道スポーツマンシップ」へと転化する。

- ⑤この経緯からしても、スポーツマンシップの概念の変化においては、文化享受現場の風土性と時代性と精神性などで構成される外的要因の影響を受ける。

- ⑥近年になると、スポーツ文化の隆盛にともなって、「スポーツをする人」の専門化や高度技術化などという「内側の問題」が発生し、また「スポーツを観る人」の多様化や目的志向分化などという「外側の問題」が発生してきて、スポーツマンシップの捉え方自体も、その「内」と「外」の問題の相克に左右されて多様化している。

われわれが日常的に耳にする「スポーツマンシップ」という言葉は、「正々堂々と公明正大に勝負を争う」とか「スポーツマンにふさわしい態度」という受けとめられ方に則して、スポーツマンシップに則っているとされ

る行為は称賛される。しかし、反対に、「相手の弱点を攻めることはスポーツマンシップに反している」などの受けとめられる行為は世間から非難される。ここにおいて、現代社会における「スポーツマンシップ」という言葉の用語法は、「競技者の行為の善し悪し」を決定する基準として定着していることが判る。さらに、常識的に「外」側の論理で捉える日常道徳上の問題として、「スポーツ観戦」の現場などにおいても適用されていることがわかる。しかし、この常識は、妥当なのであるだろうか。

本稿では、この疑問を検証するために、「相手の弱点を攻めることは卑怯なことなのか」という問題設定を行って、スポーツマンシップの本質問題を問い直すことにした。その結果、本稿の議論では、「相手の弱点を攻めること」は「卑怯なこと」ではないという結論を引き出すことになった。さらに結論に至る経緯は次の議論によって検証されている。

## 8-2 弱点を攻めることは戦略である

スポーツにおいて指摘される「弱点」の問題には2つが存在している。1つは競技者の不得手とされる技能や身体能力的に劣る部分としての「弱点a」。もう1つは試合を進める上で生じる弱みとしての「弱点b」。しかし、競技ルール上において、この2つのタイプのいずれの「弱点」を攻めることも禁止事項ではないし、むしろ「対面型スポーツ」においては「戦略」として奨励されるべきことである。逆説的にみれば、この場合、相手の弱点を攻められない競技者は自らの「勝利の方程式」＝「勝利の追求」を放棄していることになる。したがって、競技を成立させるための「大原則」である「勝利の追求」のための戦略としての「弱点を攻める」ことはスポーツマンシップに則った行為である。

## 8-3 勝利の追求が大原則である

特に対面型スポーツにおいては、競技者としての立場の問題として、すなわち競技の「内側」の問題として「相手の弱点を攻める」ことなしには、たとえ卓越した技能や身体能力をもっていたとしても、勝利を追求することができない。さらにこの場合の弱点を攻めることのできない競技者は競技自体への参加を拒否していることになる。したがって、いかなる意味においても、それがルール上許容されている範囲において、「内側の論理」としての「勝利の追求」はもっとも「基本的なスポーツマンシップ」として尊重されなければならない。この議論からすれば、反対に「相手の弱点を攻めることのできない」競技者はこの勝利の追求としての大原則に反しているのだから、反スポーツマンシップとして「スポーツを観る人」＝「外側の論理」からも評価されるべきことである。しかし往々にして、相手の弱点を攻める行為は、外側の論理からすれば、「卑怯」なことで、「スポーツマンシップに反する」と常識的に評価される。本稿では、「アンチ＝ラシュワン説」という仮説を立てて、この「内」と「外」からみる「スポーツマンシップ」に関する矛盾を論破した。

## 8-4 「アンチ＝ラシュワン」の問題

本稿では、川谷茂樹『スポーツ倫理学講義』の議論から「アンチ＝ラシュワン説」を援用して、3つのケースを議論することによって、上記にまとめた2つの問題を証明した。1つは「相手の弱点を攻めることは卑怯なことではない」ことの証明である。もう1つは「勝利の追求こそがもっとも基本的なスポーツマンシップである」ことの証明である。

1番目の議論は1992年の甲子園で起こった「松井選手に対する五連続敬遠策」の問題だった。当時の松井秀喜選手に対して明徳義塾高校の投手が戦略として「五連続敬遠」を行っ

た。世間の「目」(外の問題)はこの戦略に対して「スポーツマンシップ」に反しているとか「いや当然だった」と評価して、「松井選手は凄い」という「伝説」さえ生まれた。

2番目は1984年のロサンゼルスオリンピックにおける柔道の「山下選手対ラシュワン選手」の決勝戦についての問題だった。山下泰裕選手は「右足に大怪我」をしていた。決勝戦ではその山下の右足を攻めなかったとしてラシュワン選手が、結果的に松井の押さえ込みで「一本負け」しているものの、立派なスポーツマンシップだったと世界的に称賛を浴びた。そしてこの「一戦」は「伝説」としていまだに語り継がれている。しかし、この「一戦」をめぐる、スポーツの「内」(競技者)と「外」(観戦者)の両方の立場からさまざまな議論が想定できる。川谷茂樹はこの議論を次の3点に要約する。「弱点を攻めるのは卑怯で、スポーツマンシップに反する」「できるだけ弱点を攻めずに勝つのが競技者としてベストだ」「競技者は勝利のために積極的に弱点を攻めるべきだ」。

川谷は、スポーツ倫理学の視点から、この「一戦」に見方をこれら3つの見解を根拠として読み解いた結果として「ラシュワン伝説」の虚像を「外」から作られたものであると見破る。その際の考察の道具立てとしたのが、山下の右足を攻めなかったとされるラシュワン伝説とは反対に右足を攻めたと仮定する、「アンチ=ラシュワン説」である。

3番目は森川ジョージのボクシング漫画『はじめの一步』(2002年版)に描かれている「イーグル選手対鷹村選手」の「一戦」である。漫画では挑戦者鷹村が試合中に「左脛」を切る。しかしチャンピオンであるイーグルは鷹村の「左脛」を攻めない。そのうち今度はイーグルが「右脛」を切る。そして鷹村は故意にイーグルの「右脛」を狙うという筋立てになる。川谷茂樹と本稿は、この鷹村の行為を「アンチ=ラシュワン」に見立てて、上

記の3つの見解を適用して検討した結果、スポーツマンシップの本質は勝利の追求にあることをあらためて証明した。

結果として、「川谷議論」は、また「川谷議論を支持する本稿」は、上記にまとめた「弱点を攻めることは卑怯でなく戦略上当然のことである」と、この戦略を駆使しての「勝利の追求は基本的なスポーツマンシップである」という大原則を適用して、「アンチ=ラシュワン」こそ「スポーツマンシップ」に則っていることを確認する。しかしこの確認は「内」からの論理を根拠としてのことである。そして「アンチ=ラシュワン選手」に対して依然として「外」からの論理としてたとえば「卑怯説」が投げかけられることも事実である。

#### 8-5 勝利よりも大切なものはない

対面型スポーツにおいて相手の弱点を攻めることが勝利を求めるためにもっとも確実な手段だとすれば、ラシュワン選手やイーグル選手のように、敢えて相手の弱点を攻めない競技選手には、「勝利の追求」よりも大切なものとして、求めるべき「何か」があるはずである。その「何か」を本稿では「パフォーマンスの卓越性」「情け(思いやり・同情)」「名誉」の3点に絞って考察してみた。スポーツにおける最高の名誉は「勝利」以外に存在しない。試合において、パフォーマンスの卓越性や同情や名誉といった価値を追求することもできる。しかしこの追求の許されるのも、勝利の追求という大原則の範囲内において、可能性な問題としてのみ付随的に認められているのにすぎない。こうした価値を過大評価して、勝利の追求よりも優先させて、仮に勝利を逃がしたその瞬間に競技者は競技者の本分を放棄したとみなされてしまう。

したがって、競技者の本分としてのスポーツマンシップは、日常生活における道徳的な人格に求められる原理とはまったく異なる次

元の問題である。そうであるならば、競技者としての「あるべき姿」と、日常生活における人間としての「あるべき姿」とに隔たりがあるとしてもそれは認めなければならない。この確認の存在することにおいて、はじめて「アンチ＝ラッシュワゴン選手」が目指す「勝利よりも大切なものはない」という真実を「外側」の視点においても認めざるをえないのである。そうしてはじめて明德義塾高校の投手の「反スポーツマンシップ説」を覆すことができる。

### 8-6 スポーツマンシップの「内」と「外」

こうしてみると、一般的に問われる「正々堂々と闘うべきである」などのスポーツマンシップとは、実はスポーツの「外側」から押し付けられている価値観であって、つまり競技者の「内側」から問われている問題でないことが判る。われわれは、スポーツマンシップの概念を問うことにおいて、この「内」と「外」の問題を見落としてはならない。競技者が「内」の視点で捉えるスポーツマンシップの本質は「勝利の追求」にある。この本質を「外」の立場からも認めることにおいて、はじめてわれわれは、競技者にとってのスポーツの本質は「勝利の追求」のみにしか存在していないという所与の問題を事実として評価できることになる。

ところが競技者にとって、常識的なスポーツマンシップは、外部から期待される困難な「課題」として立ち現れることになる。たとえば「卑怯な行為は慎め」という規範は外部的なスポーツマンシップとしては誰もが認める。しかし競技現場では、「アンチ＝ラッシュワゴン」を競技者は目指すべきである。ここに矛盾が生じる。この葛藤をいかに克服するのか。

### 8-7 競技者の葛藤

スポーツとは、現実世界から空間的にも時

間的にも区切られ、独自のルールのもとに行われるものである。この意味においてスポーツは非日常的な営みであるといえる。だからこそ、日常道徳的には認められない行為が、たとえばボクシングにおける「殴る」ことが、スポーツの内部においては求められる。しかも称賛されることにもなる。しかしながら、一方ではスポーツもやはり現実世界の一部であって、「スポーツをする人」(内の問題)と「スポーツを観る人」(外の問題)とはそれぞれに接点をもっている。競技者も、日常的には、常識的道徳を基本原理とする生活に戻らねばならない。この「非日常」と「日常」との行き来において、競技者は、2つの価値規範を体現して生きていかねばならない。たとえばボクシング競技における「殴る」は「勝利の追求」を目的とするスポーツマンシップにとって不可欠の行為であるが、当のボクサーが一端日常生活に戻れば「殴る」は法に触れることになる。この経緯に競技者の葛藤を生み出す原因がある。

しかしながら、この競技者の抱える「葛藤」は、競技者という立場を選んだ者の背負わなければならない宿命なのである。競技者は、競技という現場で「アンチ＝ラッシュワゴン」のように、「勝利の追求」という「大原則」のもとに、正々堂々と自覚的に敢えて一般的な「外」からの視点における「卑怯」を選択しなければならないこともある。しかし、競技者が日常生活に戻るとき、この「卑怯」は許されるものでない。

### 8-8 伝説の虚偽性

なぜ、伝説が生まれるのか。「ラッシュワゴン伝説」は実は作られた虚像だった。川谷茂樹と本稿の検証によると、実際には、ラッシュワ gon は、あの「一戦」で「山下の右足を攻めていた」のであった。山下の証言である。しかし、攻め切れなかっただけである。ラッシュワ gon は、「攻めていない」とみなされて世界的

に「外」の「目」は、「弱点を攻めなかった」としてその態度を「スポーツマンシップに則っている」と評価した。もちろんのことに「左足」をラッシュワンは攻めた。それはこの場合は軸足となるので、その軸足が崩れれば相手は倒れるので、柔道の定石からすれば当然のことである。だから、右足を攻めていないとみなされたのかもしれない。この経緯において、「弱点を攻める」という定石としての「内」の問題に対して、「外」の「目」は伝説ともなる「虚偽性」を作り上げてしまうことが判る。

21世紀社会における観るスポーツとしての「スポーツ文化」はますます日常的に重要な生活要素となることは間違いない。そこで注目すべきことはスポーツとスポーツマンシップに常に介在する「内」と「外」の立場の相違による「ものの見方」の問題である。この問題はこれからの体育教育（スポーツ教育）の重要課題にならないといけない。

### 8-9 大原則の再吟味

これまでの「まとめ」において、スポーツの「内」からと「外」からとの「ものの見方」には埋めがたい溝が生じることも判った。一方で、「勝利の追求」こそは、競技者の発揮すべき「もっとも基本的なスポーツマンシップ」であることに相違ないことを再三にわたって確認してきた。しかし、この大原則に対して、スポーツの内部の問題として「競技者は単に勝利だけを追求してはならない」という「卓越性理論」を主張する論者も多い。

この卓越性理論では、試合の本質は「最善をつくして相手より優れていることを示す」ことにあるとみなされる。例示するならば、松井選手の五連続敬遠は相手と「堂々と勝負しない」勝利至上主義であるとして否定する。卓越性理論によれば、投手は五回とも松井選手に「真っ向から勝負して勝つべきである」と断定するのである。そして、そうしなかつ

たことは「卑怯」なことで「スポーツマンシップ」に反すると断ずる。一理はあるかもしれない。しかし本稿では、「相手の弱点を攻めることは卑怯でない」ことを証明してきたし、「勝利の追求」こそが競技を成立させるための大原則であることも確認してきた。

また卓越性理論には矛盾もあった。試合の勝利を目指して卓越性を発揮することを至上とするのであれば、競技においては、「相手の卓越性＝この場合、松井の打撃力」を封じるための戦略上の「卓越性＝この場合、五連続敬遠策」を認めないことは論理矛盾となる。

こうして本稿では、川谷茂樹「スポーツ倫理学」の教えから、「競技は勝利の追求を競うことにおいて成立する」とことと「勝利の追求こそが競技者の選択すべき基本的なスポーツマンシップである」という大原則を再吟味の作業を終えることができた。

### 9. 結論

本稿では、競技スポーツの本質は何なのか、そこへ介在するスポーツマンシップの本質は何なのかという問題を問うために、川谷茂樹『スポーツ倫理学講義』（2005）をガイドラインとして議論を展開してきた。

そして、議論の出発点として、競技者が「相手の弱点を攻めることは卑怯なことなのか」という問題を設定することになった。たとえば一般的に「スポーツを観る人」がこの問題設定に対して「イエス」と答えることは容易に推察できる。なぜならば、スポーツを「外」から観察するという一般的な「ものの見方」からすれば、この問題設定の「問い」の示唆するところは、「相手の弱点を攻めることは卑怯な行為であって」、それは「スポーツマンシップに反する行為である」と判断する方が日常的な道德概念とも合致していること当たり前の論理として受けとめられていることになるからである。

本稿は、まず上記の問題設定を議論するた

めの予備知識を得るために、「スポーツ」と「スポーツマンシップ」との語源論にまで遡ってみて、それぞれの意味が歴史的に変化してきている事実を突き止めた。そしてこの変化については参与する人間の「外」からの視点での「ものの見方」が深く関与していることも議論を通して確認してきた。

本稿では、この「ものの見方」の立場の所在を重視するがために、「スポーツをする人＝競技者＝当事者」の立場を「内」側からの視点と見定めて、また「スポーツを観る人＝観客＝外部者」の立場を「外」側からの視点と見定めて、それぞれの立場から展望する「スポーツ」と「スポーツマンシップ」とに関わる諸問題を検討することになった。

手始めの検討が冒頭の問題設定についてである。そこで、さまざまな事例との比較検討を経て、川谷議論と本稿は次の結論を得た(本文の『『弱点』の意味するもの』及び「勝利の追求とスポーツマンシップ」の節を参照)。

問題設定への解答＝競技者の立場(「内」側の問題)からの「ものの見方」では、もちろん競技ルールの許容範囲内においてではあるが、「相手の弱点を攻める」ことは競技を成立させるために不可欠の「正当な行為」であって、「卑怯なこと」ではない。

この「内」側からの視点による解答は先に例示してある「外」側からの視点による解答とは対立する概念になっている。そこで川谷議論と本稿では、ルールの遵守という大前提のもとに、競技者が追求すべき「勝利の方程式」の構成要素から、上記の問題設定への解答をさらに分析すれば次のように「下位原則」「上位原則」「大原則」が浮上してきた。

下位原則＝相手の弱点を攻めることは勝利を追求するために認められる行為である。

上位原則＝競技は勝利を追求することにおいて成立する。

大原則＝勝利の追求はもっとも基本的

なスポーツマンシップである。

そして、この「大原則」に対して、「外」からの一般常識的な反論は「それでは、勝つために、何をしてもいいのか」などという愚問を往々にして投げかけてくる。川谷議論と本稿はこの反問にも厳密に答えておかなければならない。そこであらためて競技者にとっての基本的なスポーツマンシップを二者択一しない二本柱に精選して確認した。

第1の柱(上位原則)＝勝利の追求は基本的なスポーツマンシップの大前提である。

第2の柱(下位原則)＝ルールの遵守は基本的なスポーツマンシップの大前提である。

それでは、なぜ、本稿の捉えた「山下ーラシュワン戦」における誤った「伝説」が一人歩きすることになるのだろうか。ラシュワン選手は実際には怪我している「山下の右足」を攻めていたことが本稿の検証で判明した。それなのに伝説(一般の世論形成)では、「山下の怪我した右足を攻めなかったラシュワンは卑怯な行為をしなくフェアプレーに徹していた」と観客やテレビの目に受け止められて称賛されている。この事実は「外」からの「視点」は競技の本質(勝利の追求という「内」からの視点)からかけ離れたところに向けられる傾向にあることを物語っている。

本稿は、このように外部者からの視点は虚像を作り出す「傾向」にあることを重視して、次の問題を今後の競技スポーツの在り方に関する課題のための提案として結論としたい。

いずれの競技種目にも「テレビ」の魔力が襲いかかってくるようになった。聞くところによると、バレーボールを時間性にしてサッカー同様の点数のやりとり合戦にする案も検討された形跡があるらしい。もちろん、テレビ番組にきっちり収めて視聴者サービスに努めて、人気向上をとの戦略ではあろうが、競技の本質を変えてしまえば、元も子も無く



なってしまうのかと、他人事ながら、心配でもあった。テレビは、本来、あらゆる文化を一方通行の論理で均一化してしまう。スポーツ関係者が、そのことに無頓着で、ただ人気高揚のためのみにテレビに迎合しすぎるのであれば、人間不在の、画面商品になってしまう危険性がある。(伴・1994・P.38)

ここにいう「テレビ」は「外」の視点である。伝説としての虚像は、こうしてテレビなどに培養されて、無責任に膨らんでいく。私たちスポーツ関係者はこの事実を真正面から受け止めておかなければならない。

### 【参考文献】

- 阿部生雄 1995 辞書に見る“スポーツ”概念の日本的受容 中村敏雄編『スポーツ文化論シリーズ5』 創文企画  
伴 義孝 1994 スポーツ思想の誕生—大島鎌吉の周辺— 創文企画  
広瀬一郎 2002 スポーツマンシップを考えるベースボールマガジン  
嘉戸 脩 1992 心を揺する楽しい授業話題源体育とうほう  
勝部篤美 1981 実践コーチ教本3：コーチのためのスポーツ人間学 大修館書店  
川谷茂樹 2005 スポーツ倫理学講義 ナカニシ出版  
岸野雄三 1987 最新スポーツ大事典 大修館書店  
小林 堯 2000 健康・運動・スポーツ 遊戯社